

<神々の真相 5>

これまでの一連の話は、日本の真相に始まり、シュメールこそがすべての文明・宗教の根源であることが判明した。そして、あらゆる宗教に於ける「神々」の原型は惑星ニビルの住人アヌンナキであり、彼らの“実話”が基となって神話・伝承が創造され、現在に至ることが明らかとなった。中でも重要なヤハウエ、アッラーについては言及したが、最も重要なイエス＝天照大神については言及していない。特に<神々の真相 4>では偶像崇拜について検討したが、そこではイナンナがイエスに大きく関わっていることが判明した。イナンナとドゥムジの話にはイエスの象徴が満載であるが、イエスとは「神々」の中の誰なのか、あるいは別の存在なのか、ということについては触れていない。

そこで、総まとめとして、イエスの真相に迫る。イエスは天照大神として日本で封印されているわけだから、まずは日本とシュメールの関係についてまとめる。その後、ヤハウエ、アッラーとシュメールの「神々」の対応について再確認し、最後にイエスの真相と降臨の時期について検討する。

1：日本との関係

所々で日本との関連を指摘してきたが、<日本の真相>に関連する重要な部分を抜粋し、必要に応じて説明を追加する。

- ・人類を遺伝子工学により創成したのは、蛇神として喩えられるエンキ、ニンギシュジッタ、そして“母なる”ニンフルサグである。エンキは魚、亀などとしても喩えられる“地球の主”である。シュメール語のエンは王、支配者、統治者の意味であり、“エンキ”は“地球の主”を意味する。だから、神宮御木曳きの掛け声“エンヤー”は“支配者、主ヤハウエ”という意味である。
- ・エンキとニンギシュジッタは“良い蛇”、マルドゥクは“邪悪な蛇”であり、蛇（や龍）には“良いもの”と“悪いもの”がある。西洋圏では蛇はイブを唆した邪悪な存在でしかないが、これは、牡牛として象徴される地球の監督者エンリルから見て、エンキがいつも抵抗していたことの象徴である。特にエンキの長男で“邪悪な蛇”であるマルドゥクの野望が原因でドゥムジが死に、その婚約者イナンナとの対立が核戦争にまで発展したことは、蛇が“邪悪な存在”たる最大の原型である。マルドゥクの野望さえ無ければ、イナンナも歪まずに済み、人身供犠などという偶像崇拜も起きなかったのである。対して、東洋圏では蛇（龍）は神あるいは神の使者である。日本では、鬼の角は牛の角であり、暴れ者だったスサノオの原型たる牛頭天王も牛として象徴される。牛頭天王の更なる原型はシヴァ＝イナンナであり、エンリル系の象徴である。つまり、蛇神から見たエンリル系を牛、角、鬼などとして象徴している。しかし、これらは“真に邪悪な存在”ではなく、悔い改めれば赦される存在であり、この点が、蛇を“真に邪悪な存在”と見なす西洋圏と考え方が異なる。イナンナが主神のインドでは、蛇も牛も神の使者である。

- 五七の桐の紋の原型は地球に降り立ったアヌンナキの宿営地のマークであり、これがガド族のシンボルとなった。
- アヌとアラルの戦いは、相撲の原型である。戦いに勝ったアヌが地球の人類史に於けるシュメールの大神である。アヌ＝アンであり、“天”は“あめ＝あま”で、語源は大神アヌである。大神アヌの国ニビルが天の国、すなわち天国の原型である。天国は、マルドゥクがエジプトででっち上げた概念により、善人だった死者の霊魂が行き着く場所となってしまった。
- アヌ＝アン＝あん＝阿吽＝であり、“アルファでありオメガである”ことの原型となっている。
- 太陽系の惑星としての象徴は、エンキが海王星で、占星術では魚座の守護星である。その象徴図形は、ギリシャ神話の海神ポセイドンの得物である三叉矛であり、「生命の樹」の象徴である。これが“天の逆矛”の原型である。そして、地球の象徴図形は“丸の中に十”である。
- エンリルは運命を定め、契約を重視する「神」の原型である。その目はすべてを見通すことができたと言われ、「生命の樹」の至高世界から覗く絶対神の目でもある。対するエンキは月の運行に魅せられたので、三日月が象徴である。エンキの目は“ニニギク、ニンイギク（目の清い神）”と言われ、ニニギノミコトやニギハヤヒの“ニニギ、ニギ”という言葉の原型である。またニニギ＝ニギハヤヒは物部氏の象徴であり、物部氏の最重要拠点たる熱田神宮に奉納されている草薙の剣の象徴は蛇でエンキの象徴でもあり、ニニギ＝ニギハヤヒ＝物部氏という象徴に一致する。
- 太陽神ウツの別名が“バブバル＝光り輝く者”であり、光を注ぎ、“天と地球を照らす者”であるから、これは名称的に天照大神を象徴する。ウツは最大の聖地となるエルサレム（宇宙空港）の司令官でもある。また、ウツの他の別名はシャマシュである。ウツ＝シャマシュ→ウツマシュあるいはウシュマシュ→ウツマシあるいはウシュマシ→ウズマサと変化したのであろう。
- イナンナは大神アヌの前で歌い踊り、天宇受売命の原型となった。新約では、マグダラのマリア、あるいは“マリア”という名前が象徴である。
- 神社の原型はピラミッドであり、狛犬の原型はスフィンクスである。
- イナンナとドゥムジの関係が、あらゆる“復活”神話の原型、イエス＝天照大神の原型となっている。
- 青銅はニヌルタが考案した。これが“青銅の蛇”に繋がる。蛇はヘブライ語

でナハシュである。これには2つの別の意味がある。“秘密を知っている、あるいは秘密を解決する彼”という意味と“銅の彼”という意味である。エンキは鉱山で採掘をしており、ブズルとあだ名されていた。これは“秘密を解決する彼”と“金属鉱山の彼”を意味した。つまり、ヘブライ語の“蛇”はエンキを象徴している。そこに、「神々」の中の英雄ニヌルタが考案した青銅を合わせ、“青銅の蛇”という象徴ができた。

また、主への祭壇は、四隅にそれぞれ角（つの）を作り、祭壇から生えているようにして、全体を青銅で覆った。青銅は“青銅の蛇”の材質と同じであり、光り輝いていた。頭に2本の角がある「神々」が天と海から現れたと伝えられるエンリルとエンキが、この角の原型である。四隅に角を置いたことから、角は“すみ”とも読む。また、角は“ホルン”であるが、光を表す“コルン”に読み変えることができる。

- ・英雄ニヌルタは、彼の乗っていた乗り物に因んで“黒い鳥”が象徴となった。“黒い鳥”と言えば鳥であり、天皇の側近中の側近である八咫鳥に通じる。八咫鳥が取り仕切る神社の御神事で弓が重要なもの、この英雄の星座が射手座であるからに他ならない。
- ・八角形は大神アヌとニビル、ヤハウエ、イエス（救世主、ベツレヘムの星）の象徴である。アヌ及びアヌの星ニビルの象徴としての八角形が変形され、“天”を象徴する記号と「神」を象徴する十字型になっている。つまり、これらの象徴図形は大神アヌとニビルの象徴であると同時に、シュメールの「神々」をも象徴している。
特に八角形はアヌのお気に入りだったイナンナの象徴ともされ、彼女に因む金星も同じ象徴となる。また、「生命の樹」に於ける最も重要なセフィラであるティファレトは“美”を表すが、これも“美の女神ヴィーナス＝イナンナ”に由来することを象徴しており、集まるパスの数が8本であることにより、この八角形を象徴している。
八角形で有名なのが、イエスを原型とした聖徳太子縁の法隆寺にある八角堂である。“8”に関わる御神体が、八岐大蛇の尾から出てきた草薙の剣＝アロンの杖であり、物部氏トップの尾張氏が“その時”まで保有する。
- ・十六弁八重表菊紋の原型は蓮の花で“再生”を象徴しており、日本の奥義は天照大神＝イエスだから、まさに“復活、再生”を象徴する皇室の御紋として相応しい。そして“菊”という字の“艸＝草冠”で「生命の樹」に於ける絶対三神と「合わせ鏡」の奥義、下のつくりで、ヤハウエ＝イエスを象徴している。つまり、“再生”を意味する蓮の花の象徴に、更に漢字のカッパラーを合わせて“菊の御紋”としたのである。
- ・伊勢神宮外宮の別宮には、アヌ、エンキ、エンリルが祀られている。峻巖の柱は風宮でエンリル、均衡の柱は高宮でアヌ、慈悲の柱は土宮でエンキが祀られている。

- ・シュメールの「神々」の象徴をいろいろ重ね合わせたものがカッバーラである。1つのものに様々な象徴が重ねられるが、逆に見れば、それが“分身”という形態になっており、特にヒンズー教の「神々」で顕著であり、日本では“分魂＝多次元同時存在の法則”という概念になっている。

またカッバーラとは、ある事象に対して、象徴あるいは象徴の重ね合わせで表現することである。だから、必ずしも真相を表しているわけではない。例えば、ある事象 A の一側面は B という象徴、もう一側面は別の C という象徴を重ねた場合、必ずしも $A=B=C$ ではない。B を A に重ね ($B \rightarrow A$)、C を A に重ねても ($C \rightarrow A$)、 $B=C$ とは限らないのである。だから、場合によっては矛盾が生じることもある。 $(B \neq C)$ の場合が矛盾である。) 例えば、天照大神 (A) の太陽神としての象徴はウツ (B)、木に掛けられた象徴としてはイナンナ (C) が原型であるが、ウツとイナンナは同一人物ではない ($B \neq C$)。しかし、象徴的にはウツとイナンナは双子ということもあり、ウツ＝イナンナ ($B=C$) と見なせる。この辺が、カッバーラの解釈に於いて混乱をもたらす。

2：ヤハウエ、アッラーとシュメールの「神々」の対応

(1) ヤハウエ

聖書の唯一絶対神ヤハウエは唯一絶対ではなく、何人もの「神々」が 1 つにまとめられたものである。例えば、次のような例である。

- ・天地創造：“万物の創造主”。7 日間の天地創造はエンキの話に由来。
- ・人類創造：エンキ、ニンギシュジッタ、ニンフルサグ。
- ・アダムとイブの追放：エンリル。
- ・カ・インの追放：エンキ。
- ・ノア（ジウスドラ）に箱舟を造るよう指示：エンキ。
- ・洪水後にノアを祝福：エンリル。
- ・バベルの塔に対する怒り：エンリル一族。
- ・アブラハムの導き：エンリル。
- ・ソドムとゴモラへの天罰：エンリルの指示によるニヌルタとネルガルの攻撃。

ヤハウエの前名は EL SHADDAI であり、SHADDAI の語源はアッカド語で山脈を意味する SHADU である。つまり“EL SHADDAI＝山の神”ということであり、“遠くの山に住む神”を意味するイシュクルの象徴である。（＜神々の真相 3＞）

そして、ヘブライ語の“主”を意味する“アドーナイ”は、イナンナがドゥムジを呼ぶ声である。（＜神々の真相 4＞）

また、ヤハウエは姿を見せない「神」であり、ヤハウエの出現に伴う雷や稲妻は、宇宙船からの光や轟音である。このように考えると、真沸流や対抗する畿内の物部氏（尾張氏、海部氏）の前に現れた“光り輝く金鵄”とは、「神々」の乗った宇宙船であり、そこからイエスが現れて「私は在りて在る者」と言うことにより象徴的にヤハウエ＝イエスであることが判明し、真沸流が初代応神

天皇となったことも理解しやすい。

なお、ヤハウエに関わる重要な神器、契約の箱アークは飛鳥氏が言うような殺人兵器などではない。材料はアカシヤ材で内側も外側も純金で覆われ、贖いの座も純金製であり、周囲に金の飾り縁がある。箱の四隅の脚には 4 つの金環があり、箱を担ぐための棒は金で覆われたアカシヤ材である。金は最も良好な電気の良導体であり、雷のように宇宙船から電流を流せば、アーク自体が帯電し、触れた者は感電死する。何よりも、アークという言葉は、“アーク放電”に通じる。ヤハウエは純金製の一对のケルビムの間＝贖いの座の上に臨み、人々に命じることを語ったから、贖いの座は（ゼカリヤ・シッチン氏流に言うと）通信装置だった可能性がある。（金はニビルにとって最も重要な金属であるが、電子機器にも欠かせない重要な素材である。）

(2) アッラー

アッラーとは、アラビア語で“Allah=Al ilah=神”の意味であるが、読みに注目すると“アル・ラー=神ラー”ともなり、ラーと言えばエジプトの太陽神ラーRa で、マルドゥクのことである。

エジプトは太陽神ラーを中心とする多神教だったが、現在はアッラーを信じるイスラム教である。共に、同じ神“ラー”であるならば、一貫してラーを崇拝していることになり、矛盾は無い。また、かつてのバビロン、現在のイラクを含めた中東もイスラム教である。中東での宗教の歴史と「神々」の権力委譲とを比較すると、次のようになる。

- ・主にエンキ→エンリル系→マルドゥク。
- ・ヤハウエ→イエス→アッラー。

中東はエンキ→エンリル系→マルドゥクと支配権が移動し、その後、ユダヤ教→キリスト教→イスラム教と宗教が変遷した。つまり、エンキが言うように、過去の物語の中には未来の輪郭が記されており、歴史を繰り返すとしたら、イスラム教の主神アッラーはマルドゥクとなり、矛盾しない。

アッラーは如何にもヤハウエのようである。しかし、マルドゥクは神話・伝承を改竄したりでっち上げたりして、常にすべての「神々」の上に君臨しようとした。アッラーはイエスを認めてはいるものの、イエスが「神」あるいは「神の子」であることも明確に否定しており、自分こそが唯一絶対であると宣言している。また、アッラーは“産みもせず、生まれもしない”絶対的存在である。そうすると、イエスが「父よ」と言っている唯一絶対神は否定されることになり、矛盾する。つまり、ここに“でっち上げ”の跡が伺えるのである。

よって、アッラーはマルドゥクであると言える。日に何度も礼拝させたりするなど、如何にもマルドゥクらしい。（＜神々の真相 1＞）

(3) イエスの象徴

これまで、イエスに関連する様々な象徴を述べた。ここではそれらを簡単にまとめ、イエスの真相を検討するための手掛かりとする。

- ・イエスの象徴は“輝く明けの明星＝金星”であるが、大元は「神々」の星ニビル、そして大神アヌの象徴であり、後に主にイナンナの象徴となった。金星は八角星として象徴され、八角形あるいは“8”は救世主の象徴である。イエスが誕生した時に、天空に輝いたベツレヘムの星は八角星として象徴される。また、イナンナは真のサタンではなく、聡明で美しい女神だから、“宵の明星”ではなく“明けの明星”となる。八角星に後光がさした様子が十六角星あるいは十六花卉として象徴され、これもイナンナを象徴するロゼッタである。なお、皇室の十六弁八重表菊紋は、菊の御紋にして菊の花に非ず。“再生”“復活”“永遠”を象徴すると同時に、古事記と日本書紀に於ける絶対三神の「合わせ鏡」、高御産巢日神、マナ、十字架、そしてイエスの象徴まで封じ込めた象徴である。
- ・イナンナがアヌの愛人となったことは、アヌの象徴＝十字型＝十字架にも重ねられる。
- ・イナンナと太陽神ウツは双子だから、象徴的に同一と見なせる。ウツの別名は“バブバル＝光り輝く者”であり、光を注ぎ、“天と地球を照らす者”であり、これは名称的に天照大神そのものである。
- ・太陽神ウツは、シュメールの楔形文字では“UD”であり、“輝く”とか“白い”という意味である。これが“光”“ヨシュア”“イエス”を表す“ウズ”の語源である。そして、UDは“ユダ”とも読め、ユダ族の王イエスは太陽神ウツに関わりが深いことを暗示している。
- ・マルドゥクの奸計によりイナンナの婚約者ドゥムジは亡くなったが、それが原因で最終的に核戦争が勃発した。
- ・旧約の“主”を意味する“アドーナイ”は愛するドゥムジをイナンナが呼ぶ言葉であり、新約のイエスはマルドゥクの奸計によって死んだドゥムジが原型であり、旧約の“主＝ヤハウエ”と新約のイエスが象徴的に同一となる。
- ・ドゥムジの遺体には赤い経帷子が着せられたが、イエスは赤い外套を着せられ、茨の冠を被せられ、葦の鞭で打たれた。ドゥムジの遺体は“眠りから覚める日”を待つために洞窟の横穴に葬られたが、イエスは処刑後に洞窟の横穴に葬られ、3日後に“復活”した。また、イナンナがドゥムジの遺体を貰い受けるために、冥界として喩えられる姉エレシュキガルのいる“下の方のアブズ”まで行ったが、姉の勘違いと嫉妬により、杭に吊るされて“殺された”が、エンキの密使の助けにより“復活”した。そして、イナンナはドゥムジの“復活”を信じた。このように、イナンナとドゥムジの物語には、“復活”が重要なイエスの象徴が満載である。
- ・王位継承数字的にドゥムジとウツは同一と見なすことができ、両者の象徴を

重ね合わせることができる。だから、“復活”には直接関係の無い太陽神ウツに、“復活”を期待され、イエスの原型となっているドゥムジの話を重ねることができる。そして、ウツはイナンナと双子だから象徴的に同一と見なせ、“杭に吊るされて蘇った”話を、人類の贖罪を背負って十字架に掛けられ、人類の光＝太陽となったイエスに重ねることができる。つまり、イエスの太陽神の象徴としてはウツ、本来のイエスの原型としてはドゥムジ（とイナンナ）であり、象徴的にイナンナ＝金星＝ウツ＝太陽神＝イエス＝ドゥムジとなる。また、イナンナをスサノオとして中心の鼻、ドゥムジを月読命として右目、ウツを天照大神として左目に配していることに反映されている。

- ・ドゥムジはニビルから子羊を降ろしたから、イエスの象徴は“神の子羊”にも成り得る。
- ・王位正統継承権はマルドゥクではなくドゥムジにあり、実際のシュメールの王の系統は、象徴的にドゥムジに重ねられるウツの子孫から始まった。これは、スサノオが八岐大蛇を退治した際、尾から草薙の剣を見つけ、天照大神に献上した話に反映されており、太陽神ウツの系統が天孫の系統、ということを示している。
- ・イエス誕生時、東方の三博士が祝福のために黄金、没薬、乳香を持ってきた。黄金はニビルの象徴であり、大神アヌの象徴でもある。没薬はアドニスに象徴されるドゥムジを表す。乳香はフェニックスとナツメヤシに象徴されるイナンナを表す。フェニックスの不死鳥伝説は、イナンナの行っていた“聖なる結婚”の儀式を、バビロニアの主神となったマルドゥクがでっち上げたものである。
- ・東方の三博士とは、ドゥムジを祝福するイナンナ、エンキ、ニンギシュジダの象徴である。
- ・偶像崇拜の根源はマルドゥクが拝ませていたベンベンである。人身供犠は、イナンナの行っていた“聖なる結婚”の儀式が曲解されていったものである。マルドゥクが主神となって以後、偶像崇拜と人身供犠が重なったカナン地域と民族は、主から忌み嫌われ、呪われた。
- ・マルドゥク率いるイギギが反乱したこと、イナンナが知恵の根源である“メ”をエンキから奪ったこと、イナンナが“聖なる結婚”の儀式を始めたことがルシファーの原型である。特に、光の天使ルシフェルが知恵を知ることにより神になれると錯覚し、天から堕ちて墮天使ルシファーとなり、“明けの明星”＝金星として象徴されるのは、イナンナが金星で象徴されるためである。
- ・ヘブライ語でアシラは異教の女神で、それは主にアッシリアの女神のことであり、イナンナのことである。柱に関連する神と言え、イナンナが主神で

あるインダス文明の神々の中に柱から出てきた神がおり、イエスの予型となっているヴィシュヌの化身の1つ、ヌリシンハ（人獅子）である。

- ・シヴァの原型はイナンナであり、シヴァの暗黒の化身バイラヴァは牛頭天王であり、牛頭天王と言われる日本の神はスサノオである。スサノオが高天原で暴れたことが原因で、天照大神が岩戸に籠られたが、天照大神とスサノオは双子である。これはシヴァの原型であるイナンナがヴィシュヌの原型である太陽神ウツと双子だったことに対応し、スサノオが高天原で暴れたことは、イナンナが「神々」の闘争を引き起こしたことが原型となっている。
- ・エンキは亀としても象徴される。魚、蛇、亀、いずれもエンキの象徴である。また羊もそうであり、“神の子羊”である。太陽神ウツはサソリ、牛、馬にも関係する。サソリは日の出、日の入りの番人であり、後に翼が付いて鷲となった。牛は牛頭天王と関係する。馬は白馬に乗って再臨するイエスと関係する。人、サソリ（鷲）、牛、馬でメルカバーを形成する。
- ・太陽神ウツとイナンナは、王位継承数字的に夫婦と見なせる。日本では天照大神＝猿田彦で、猿田彦の妻は天宇受売命だから、天宇受売命の原型はイナンナである。また、イナンナは“裸の女神”として描かれていることが多く、天宇受売命とマグダラのマリアの原型である。そうすると、イエスの原型がウツとドゥムジならば、イエスとマグダラのマリアは象徴的に夫婦と見なせる。

3：イエス＝天照大神の真相

“主エンキの御言葉”を読むと、神話・伝承や聖書の原型はすべてここにあると言える。つまり、聖書などはこれを基にした後世の創作に過ぎない、と。それほど、このタブレットの内容は一貫性がある。そうすると、すべてシュメールの史実に基づく寓話で、イエスは存在しなかったのか、伊勢神宮に存在する聖十字架は偽物なのか、という疑問が湧き上がる。

まず、イエスが実在ではなく、単に書物に記載されただけの人物であるとしたら、これほど広がって信仰されることはない。現在ならば、マスメディア等で即座に広がり“洗脳される”ことも可能であるが、当時の媒体は“人と書物”だけである。現実起きたこと、それに類することが起きていなければ、人々は到底信じないであろう。現実にはイスラエル十二支族が存在すること、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教を信じる者が圧倒的に多いことは、やはりその時代に、実際に聖書に書かれていること、あるいはそれに類することが起きた、と考えるのが妥当である。インターネットのような同時共用性の情報網が発展していない時代、ありもしない空想話が多くの人に伝えられても、否定されるだけである。

また、東洋では蛇や龍が神だから、その根源とも言える蛇神の象徴を保持していれば、「神」の直系の子孫と称して、アジア制覇などは可能であっただろう。

しかし、わざわざアジアの端の海を隔てた日本で、中国の脅威に怯えながら、千数百年にもわたって隠し続けてきた。しかも、完全に隠すのではなく、本来のカッパーラの象徴で封印し、封印が解かれるのを待っているのである。時が満ちるまで。ならば、それなりの理由があるはずである。

これまで見てきたように、神道が守ってきた本来のカッパーラを使うことにより、あらゆることを辻褄が合うように説明でき、聖書の黙示録の意味は勿論、「神々」の真相にまで辿り着くことができるのである。ならば、イエスは実在し、磔刑に処せられて“復活”し、降臨して王権を天皇家に授け、関連する“御神体”を“その時”が訪れるまで封印されていることは事実であると認めるのが妥当である。

神宮にはイエスが掛けられた本物の聖十字架と、モーゼの十戒が納められた契約の箱、マナの壺があり、熱田神宮にはアロンの杖がある。これらの“物的証拠”が千数百年にもわたって封印されてきた。封印を守ってきた組織は八咫鳥であり、彼らはアロンの直系、アブラハムの直系、セムの直系である。何故の封印かと言えば、“運命によって指定された時”に初めて公開するためである。その時にこそ、天照大神が降臨してすべてが明らかとなる。

既に述べたように、ユダヤ教の唯一絶対神ヤハウエは、エンキとエンリルを中心としたシュメールの「神々」が 1 人にまとめられたものであり、イスラム教のアッラーはマルドゥクである。しかし、イエスの正体については、非常に重要なヒントが多く登場したものの、シュメールの「神々」の中の誰なのか、特定できていない。可能性があるのは太陽神ウツ、その双子のイナンナ、彼女が愛したドゥムジ、大元の神である大神アヌ、野望で地球全土を手中に収めて君臨したマルドゥク、知恵の根源であり、あらゆる原型であるエンキとその息子ニンギシュジッタである。

1：と 2：(3)ではイエスに関連する事項をまとめたが、更に“主エンキの御言葉”＜神々の真相 1＞で参考になる部分をまとめる。

・序

「神々」による核戦争前夜、禁断の兵器を使うことに反対したのは、人類の生みの親で蛇神として象徴されるエンキただ 1 人だった。

・ 14：(6)

エレシュキガルによってイナンナが杭に吊るされたが、エンキの助力により“復活”した。

ヤハウエとイエスが言った“私は在りて在る者”はヘブライ語で“存在した、存在する、存在し続ける”ということ、アルファでありオメガであること、最初で最後であること、つまり永遠ということであり、エンキはこのタブレットの前置きで同じことを言っている。

・ 14：(9)

瀕死のマルドゥクが助けられて“復活”した。

・ 15 : (5)

アヌは地球と地球人は為るがままに任せ、知識と正義、道徳的正しさを教えたらし立ち去るよう、エンリルたちに命じた。

・ 15 : (11)

ニンギシュジッタが“翼のある蛇”ケツアルコアトルとしてアメリカ大陸に渡り、マヤ文明の暦を作った。そして、おそらくピラミッド内部に“死と復活”を象徴する石棺を置き、双子山のピラミッドにもう 1 つの山を付け加えて 3 つの山とした。

・ 15 : (12)

エンキはあらゆる種類の“メ”をマルドゥクに与え、あらゆる種類の知識を授けたが、唯一、“死者を蘇らせること”は教えなかった。

・ 16 : (1)

イナンナはウツの孫と一夜を共にし、不死宣言した。しかし、エンキとニンフルサグは「死者を蘇らせることは不可能だ」と言った。つまり、“死者を蘇らせること”とは、仮死状態や瀕死の状態から救う医療技術のことである。

・ 16 : (3)

マルドゥクがラーとして“死後の復活”をエジプト人に教えたが、それはイエスの“死と復活”と関連するようなものではない。

・ 16 : (11)

マルドゥクが全アヌンナキに君臨する「神」として宣言し、これが引き金となって核戦争が勃発した。

・ 17 : (1)

マルドゥクが支配権を主張したバビロンだけは核の惨禍を逃れ、マルドゥクの覇権が認められた。

・ 17 : (3)

ニビルから始まり、地球での今日までのあらゆる出来事と決断を、“未来の世代への道標”となるように記録に残したのはエンキである。これが、あらゆる神話や伝承、聖書の根源となっている。これはまた、“未来”を預言として理解するためのものである。

では、これらのことを踏まえ、どの「神」がイエスに相当するのか検討する。

(1) マルドゥク

マルドゥクはすべての「神々」に君臨する「神」になることを望み、“地球の主”となることを望んだ。聖書を表面的に読むと、旧約のヤハウェは唯一絶対

神で他の「神々」の崇拝を禁じており、マルドゥクの神である。また、“地上で最初の勇士となり、主の御前に勇敢な狩人”であるニムロデの原型はマルドゥクであり、「神」の意志を伝える預言者ナビゲータの語源はマルドゥクの息子ナブである。新約のイエスもマルドゥクと考えれば、イスラム教のアッラーがマルドゥクであるため、すべてマルドゥクで統一され、如何にも筋が通っているように思える。

マルドゥクの領地はアフリカであり、ニビルの法律からすれば“正統な継承者”ではなかった。しかし、エンキの息子、“正統な継承者”としてメソポタミアも欲した。その野望のため、一度は命を助けられたのにも関わらず、すぐにエンリルらに反抗して兄弟からも疎まれた。そして、偽の情報を流して人類を煽動し、自分こそが「神」である、と吹聴した。これが他の「神々」の怒りを買ひ、特に配偶者ドゥムジを策略によって殺害されたイナンナの怒りは尋常ではなかった。最終的には、この2人の確執が引き金となって、核戦争となったのである。

しかし、マルドゥクが支配権を主張していたバビロンだけは核の惨禍を免れた。そのため、エンリルは牡羊座の時代という“宿命”に委ね、エンキの進言通りマルドゥクの権威を認め、マルドゥクは全中東域に君臨する「神」となり、神話を自分に都合の良いように書き換えた。だから、メソポタミア（に限らずほとんどの文明）の神話は矛盾が多く、わけが解らない。元々のマルドゥクのお膝元であるエジプト神話ですら、大混乱している。バビロニアなどの神話では、バアルの大元の原型はエンリルである。確かに、人類を洪水で滅ぼそうとした点ではそうであろう。しかし、最終的には人類を認め、文明を授けることに尽力した。そのエンリルらに対して、マルドゥクはいつも対抗していた。つまり、一般的に言われている偶像崇拝の根源たるバアルの原型は、常にエンリル系に対して反逆していたマルドゥク自身である。それが、マルドゥクがメソポタミアを支配するようになってから彼自身が主神となり、エンリルとの立場を逆転させた。そして、「神」＝マルドゥクの言葉を伝えるのが、忠実な僕で息子のナブであり、これがナビゲータ＝預言者の原型である。

つまり、マルドゥクにより人類の「神々」に対する理解は混乱し始めた。そして、時を経るに従い、真実はほとんど忘れ去られてしまった。

このように見えてくると、忘れ去られた“唯一絶対神マルドゥク”の記憶を“復活”させるために、そして人々が“本当の神”のことを忘れかけた頃に、マルドゥクが再び“神”として振る舞ったのがヤハウエであり、イエスであり、アッラーであるとも見なせる。また、“マルドゥクの野望によって蒔かれた種は、そこからどんな作物が生じようと、彼が刈り取れば良い”というエンリルがエンキに言った言葉からしても、核戦争後に君臨した「神」はすべてマルドゥクである、という解釈も可能である。

それに、現在の数学はマルドゥクが採用した10進法が基本であり、“10”は十字架に通じ、メルカバーを構成する“4”は $1+2+3+4=10$ で“10”の基底となり、如何にも救世主を象徴しているようにも思える。果たして、このよう

な解釈で良いのだろうか。

「神々」が人類に文明を授けて去ってから月日が流れ、エジプトが繁栄し、ヘブライの遊牧民はさ迷っていた。そして、あちらこちらで人々はバアルをはじめとした偶像崇拜の「神々」を拝み、人身供犠や性的狂乱を行っていた。その頃、新たな宗教が芽生えた。ユダヤ教である。ユダヤ教の神はヤハウエであり、エンキ、エンリルなどの「神々」が 1 つにまとめられたものである。ヤハウエはそれ以外の神の崇拜を禁じているので、マルドゥクでは、とも思える。しかし、バアルなど偶像崇拜の「神々」の本質はマルドゥクである。セム語のバアルはバビロニア式発音ではベルとなり、“主人”を意味するが、固有の名はマルドゥクで、ヘブライ名でベルとなる。つまり、聖書に登場するバアル＝ベルはマルドゥクであることを、言語学的にも示唆している。

偶像崇拜（＝誤解された神々の信仰）には、ほとんどと言って良いほど、人身供犠や性的儀式が付き物だった。その原型はイナンナである。ギグヌに於けるイナンナの“聖なる結婚”の儀式は性的儀式であり、ほとんどの英雄たちは朝には死んでいたのも、（女）神には王の肉体と血が必要であると思われ始め、人身供犠の原型となった。更に、マルドゥクが乗っ取ってから混乱に拍車を掛けた。当初、マルドゥクはイナンナの行っていたことを彼流にアレンジした。しかし、時を経て「神々」が去ると、司祭や高僧が男神としての役割を果たすようになり、穢れの無い処女が神の代役と交わる役目となった。そこに肉体と血という概念が合わされ、本物の人身供犠へと変化していったのである。彼らが崇拜していた代表的な神がバアルであるから、その本質は男神マルドゥクである。以上のことから、イナンナとマルドゥクがサタン（ルシファー）の原型となった。

このような偶像崇拜が盛んになってくると、大神アヌの命によりエンキやエンリルらが人類に授けた正義と道徳は崩壊してしまう。そのため、エンキやエンリルらが 1 つにまとめられたヤハウエが、それを食い止める役割を担ったと考えられる。ヤハウエの大部分はエンキであるから、エンキと息子のマルドゥクが治めていたエジプトについては、かなり寛容な扱いとなっている。もし、マルドゥクがヤハウエならば、バアル＝マルドゥク崇拜を止めさせたり、エジプト人の神＝ラー＝マルドゥクを中心とする多神教と対抗したりしているのは一人芝居となり、矛盾する。（モーゼがファラオと対決する場面など。）

また、ヤハウエは特にカナン地方の偶像崇拜を忌み嫌った。この地方こそ、核戦争前にマルドゥクが人々を煽動した場所であるから、そこでの「神」を否定することは、マルドゥク自身を否定することに他ならない。

そして、旧約と新約は象徴的なカッパーラで満たされており、このような知恵を駆使できるのはマルドゥクではなく、エンキやニンギシュジッダである。

マルドゥクは継承権が無かったが、最終的にエンリルからニヌルタに与えるはずだった王位継承数字 50 を与えられた。よって、聖書に於いてヤハウエがヘブライの民を 40 年間さ迷わせたという象徴的数字 40 や、契約の箱は 1 箇所に

最大でも 20 年間しか安置されなかったという象徴的数字 20 は、マルドゥクを象徴するものではない。そして、50 という象徴的数字はほとんど登場しない。これは、50 はエンリルとニヌルタにも関わるため、数字からどの「神」を表しているのか特定することが困難となるためと考えられる。つまり、ヤハウエはマルドゥクではない。

数字の関連では、マルドゥクは 10 進法を採用し、1 年も 10 の月に分けた。確かに、現在は 10 進法が基本であるが、科学技術の根幹を担うコンピュータは 2 進法が基本である。それに、1 年はナンナルが定めた 12 の月に分けられている。だから、現在も 10 進法が基本だからといって、それだけでマルドゥクの象徴とはなり得ない。

その後はイエスの登場である。厳しいヤハウエの教えを人々が忘れ、偶像崇拜が再び盛んになった頃にイエスは登場した。イエスは徹底的に偶像崇拜を禁じた。これは、マルドゥク崇拜を禁じたことと等しい。そして、イエスはダビデの血統＝王族となっており、実際のシュメールの王の系統は、象徴的にドゥムジに重ねられるウツの子孫から始まったので、ウツの系統と関わりがある。

また、マルドゥクは瀕死のところを助けられたのにも関わらず、まったく反省の色が無く、“復活”の意味も良く理解していなかった。ラー＝マルドゥクが決めた（でっち上げた）エジプトの死生観などは良い例である。エンキはあらゆる種類の知識をマルドゥクに与えてエジプト文明繁栄の手助けをしたが、唯一、“死者を蘇らせること”は教えなかったのである。だから、マルドゥクが“死と復活”を象徴する石棺及び 3 つ並ぶピラミッドとその意味について知る由も無い。石棺ともう 1 つのピラミッドはマルドゥクが造ったものではなく、ニンギシュジッダが造ったものである。そのマルドゥクが、“復活”を約束して人類の贖罪を背負い、自ら十字架に掛けられることなど、あり得ない。マルドゥクは人類を支配することしか頭に無かったのである。だからこそ、お膝元のエジプトでさえ、神話や死後の世界観をでっち上げることを、何とも思っていなかったのである。

何よりも、イエスは天照大神であり、日本で蛇神として祀られている。それは“良い蛇”であり、“邪悪な蛇”ではない。マルドゥクは“邪悪な蛇”とあだ名されていたのである。よって、イエスはマルドゥクではない。

最後はイスラム教である。イエスが昇天してからかなり経過して、アッラーがムハンマドを導いた。基本は旧約で、アッラーの教えこそが絶対であり、ヤハウエ＝アッラー＝ラーとした。これは、シュメールの様々な「神々」の役割を乗っ取ったことと重なる。つまり、ここでも過去と同じことが繰り返されたのである。そして、岩のドームはムハンマドが昇天した場所であるが、ここはアブラハムが息子のイサクを神のために捧げようとした台であり、ユダヤ教とキリスト教の聖地でもある。そこは現在、イスラム教＝マルドゥクの支配下にある。エンキが言うように、まさに過去の中に未来がある、それがこのような現実となっている。

マルドゥクはニビルで生まれたから、その名が意味するように、確かに“純

粹な場所で生まれた者”であり、エジプトの神ラー（輝く者）であったが、その本質はヤハウエではなくバアルであり、絶対服従を強いるアッラーである。イスラム教ではイエスは救世主として認められているが、イエスはあくまでも唯一絶対神アッラーの僕に過ぎない。また、アッラーは“産みもせず、生まれもしない”絶対的存在である。そうすると、イエスが「父よ」と言っている唯一絶対神は否定されることになり、矛盾する。つまり、ここに“でっち上げ”の跡が伺えるのである。このことから、イエスはマルドゥクではない。むしろ、預言者の原型となった息子ナブの方が、まだ合っている。イエスがナブで、「父なる神」がマルドゥクというように。

ならば、マルドゥクの息子ナブがイエスなのか。否、である。イエスは偶像崇拝を徹底的に否定する、厳しい側面を有する慈悲の存在である。そのイエスが絶対的存在と見なしていたのが「父なる神」であるから、「父なる神」も人類に対する慈愛に溢れているはずである。イエスが人類の贖罪を背負って十字架に掛けられたからこそ、人類の犯した罪は「父なる神」によって赦されたのである。しかし、マルドゥクはアヌに赦されても即座に激怒し、人類と地球を支配することしか考えていなかった。よって、マルドゥクが「父なる神」であるはずはなく、その息子ナブがイエスであることも否定される。ナブはあくまでも預言者の原型であり、イエスは“預言されし者”である。それに、ナブにはイエスほどの知恵は無い。

またヨハネ黙示録では、終末には“大バビロン＝淫らな女たちや地上の忌まわしい者たちの母”が倒れ、大いなる都バビロンは、荒々しく投げ出され、もはや決して見られなくなる、とある。“大バビロン”とは、核戦争後にマルドゥクが支配することになったバビロンのことである。このバビロニア貨幣経済が現在の貨幣社会の基となっている。そして、マルドゥク崇拝は偶像崇拝であり、貨幣も偶像の1つである。貨幣＝マネーの語源は、地獄の4人のサタンの1人で、富＝カネの神であるマモン・ラーである。このサタンの名前にはマルドゥクを象徴する“ラー”が入っており、本質がマルドゥクであることを示唆している。つまり、“大バビロン”はマルドゥクが支配していたバビロニア貨幣経済を継承する現在の寡頭資本主義も象徴している。大バビロンは淫婦としても喻えられているが、これも偶像崇拝に付き物であった性的儀式を象徴し、現在の世界各地で見られる性的退廃の象徴でもある。原型はイナンナであるから、“大バビロン＝淫らな女たちや地上の忌まわしい者たちの母”となるし、あるいは、マルドゥクの「合わせ鏡」として“大淫婦”となる。しかし、“第7のラッパ”が鳴らされると、すなわち“その時”が来る＝イエスが降臨する時になると、“大バビロン”必ず崩壊するのである。これからも、イエスがマルドゥクならば自己矛盾が発生するので、イエスがマルドゥクであるという説は否定される。

これは、日本神話でも暗示されている。草薙の剣である。草薙の剣は権威の象徴で、八岐大蛇の尾から取り出され、天照大神＝イエスへ差し出された。八岐大蛇は“邪悪な蛇”だから、マルドゥクの象徴でもある。つまり、マルドゥクからイエスに権威が移譲されることの未来預言になっている。現在はバビロ

ニア式貨幣経済の隆盛と偶像崇拜（三百人委員会による洗脳、性的退廃、生命軽視の悪魔主義）により、人々が墮落しきった世界であり、マルドゥクの支配に他ならない。そして、近い将来、世界の終末にはイエスが降臨し、最終的にイエスにより統治される。このことから、イエスがマルドゥクであるという説は否定される。

マルドゥクはエジプトの「神」ラーであり、バアルをはじめとしたあらゆる偶像崇拜の「神」であり、絶対服従を強いるイスラム教のアッラーであり、決してヤハウエやイエスではあり得ない。マルドゥクをすべての「神」と見なすことは、最も陥りやすい誤りである。

(2) ドウムジ

2: (3) でまとめたように、ドウムジの遺体には赤い経帷子が着せられたこと、彼の遺体は“眠りから覚める日”を待つために婚約者イナンナによって洞窟の横穴に葬られたことが、イエスの物語の原型となっている。また、ドウムジはニビルから子羊を降ろしたから、イエスの象徴は“神の子羊”にもなり得る。

しかし、ドウムジは確実に死んだのであり、仮死状態で回復したりしていない。そして、エンキもニンフルサグも「死者を蘇らせることは不可能だ」と言っており、ニビルの高度な科学をもってしても、死者を蘇らせることは不可能である。よって、ドウムジはイエスではない。

仮に、死んだドウムジから遺伝子を採取してクローンを創ったとする。そのクローン・ドウムジにとって、実父はエンキであり、母はエンキの愛人ドゥツツルで、共にアヌンナキであるから“神の子”である。しかし、イエスは自らを“人の子”と言っており、ニビルは男系社会であるから、少なくとも母親は人間の女性でなければならない。つまり、クローン・ドウムジが創られていたとしても、イエスにはなり得ない。この“神の子”“人の子”という言葉が、真相を解く手掛かりとなる。

(3) 太陽神ウツ

2: (3) でまとめたように、天照大神＝イエスには太陽神ウツの象徴が最も相応しい。また、中東での宗教の歴史と「神々」の権力委譲とを比較すると、2: (2) でも示したように、次のようになる。

- ・主にエンキ→エンリル系→マルドゥク。
- ・ヤハウエ→イエス→アッラー。

この対応によれば、イエスはエンリル系に相当する。イエスはダビデの系統、すなわち王の血統であり、王はエンリルやニヌルタが認めてはじめて王となり得たので、ウツがイエスであったとしても矛盾しない。

「神々」以外で最初にウルクの支配者となったのは、ウツと人間の間の子メシュキアガシエルである。ウルクは大神アヌが公式に地球に降臨する際に使用する神殿があった。そして、メシュキアガシエルの子エンメルカル（ウツの孫）

がウルクの支配者となった。

また、正統血統であるセムの息子アラムにはウツ、フル、ゲテル、マシュという子がいる。ウツは太陽神ウツと同じであり、フルはシュメールとヒッタイトを繋ぐフルリ人（アーリア人）と応神天皇の元の名前である真沸流に類似し、マシュはウツの別名シャマシュに類似し、ゲテルは「生命の樹」に於ける第 1 セフィラ “ケテル” に類似して太陽の輝きも象徴するから、いずれも太陽神ウツに関係がある。そしてアラムとは、イエスが生存していた頃のイスラエルの主流言語アラム語に一致する。

しかし、これまでの「神々」の歴史を振り返ると、ウツが登場するのは宇宙センター（エルサレム）の司令官であること、人類に法を授けたこと、ウヌグ・キの最初の王がウツの息子メシュキアガシェルであること、ギルガメッシュの曾祖父がウツであること、などである。そして、ウツはマルドゥクやイナンナのような罪を犯しているわけではないし、人類の贖罪を背負う理由が無い。（唯一、不老不死を求めたギルガメッシュを管制塔まで連れて行ったことぐらいだが、結局、彼は不老不死にはなれなかったもので、その“罪”の清算は済んでいると見なせる。）

そうすると、カッバーラの様々な象徴としてはウツが最適なのだが、百歩譲って双子のイナンナの犯した罪の責任を取るとしても、イナンナよりマルドゥクの犯した罪の方が重大であり、ウツ自身が十字架に掛けられる必要性はまったく無い。むしろ、イナンナやマルドゥクが十字架に掛けられるべきであろう。

よって、ウツ自身が十字架に掛けられたイエスであるという説は、史実としてかなり信憑性が低い。

なお、ウツは人間の娘との間に子をもっているが、他の「神々」のような奔放な性愛は語られていない。つまり、ウツも何人かの人間の娘と交わった可能性がある。

(4) イナンナ

イナンナの象徴は八角星で救世主の象徴であり、ベツレヘムの星の原型である。また、姉エレシュキガルによって一度杭に吊るされたが“復活”しており、“復活”の原型である。そして、彼女がドゥムジを呼ぶ声“アドーナイ”が“主”という言葉の原型である。更に、イナンナは天照大神の象徴が満載のウツと双子であるから、カッバーラ的には一心同体で同一と見なすことができ、イエスとしての象徴が満載である。

イナンナには性的墮落や交戦好きという暗黒の側面があり、それが様々な宗教に於けるサタンや暗黒側面の原型となった。だから、イナンナが罪滅ぼしとして人類の贖罪を背負い、十字架に掛けられたとも言える。

しかし、イナンナは既にエレシュキガルによって一度杭に吊るされ、“復活”している。この話こそ“復活”の原型であるが、イナンナは勝ち気で好戦的であるから、自ら十字架に掛けられることは考えにくい。

更に、イエスがいつも「父よ」と言っていたことからすると、イナンナがイ

エスであるならば、父は誰なのか。実父ナンナルか、祖父エンリルか、はたまたイナンナをお気に入りだった大神アヌか、叔父イシュクルか。

イナンナはエンリルの命令に逆らって、配下のナラム・シンの軍隊に第4の神聖な地域を通過させるという冒瀆行為と違反行為を行った。それに対してエンリルは激怒し、エンリルの命でアガデは全滅させられた。

また、アヌは滅多に地球には来訪せず、イナンナはイシュクルと仲が良くて父親と言うよりは友人であり、実父ナンナルとの話はほとんど出てこない。そうすると、イエスが言っている「父なる神」を特定できない。

あるいは、「父なる神」は特定しなくとも、何人かのアヌンナキである、と見なしても良い。しかし、そうしたところで、イナンナが「父なる神」を絶対視し、それには反抗しない理由は、どこにも無い。

また「合わせ鏡」によって“女神イナンナ”が“男神イエス”となっているとも考えられるが、イエスは日本で男神・天照大神として祀られているから、イエスは男神でなければならない。

よって、イナンナはイエスではない。イナンナは、マグダラのマリア、シヴァ、スサノオ、天宇受売命の原型である。

(5) 大神アヌ

すべては大神アヌに帰着される。八角形も十字も、元は大神アヌの象徴であり、ニビルの象徴である。

アヌはマルドゥクを赦したが、マルドゥクは反省もせず、即座に野望の塊と化した。そこで、マルドゥクを赦したアヌ自身が責任を取り、イエスとなって十字架に掛けられた、と考えられないこともない。

しかし、アヌが十字架に掛けられたイエスだとしたら、イエスが言うところの「父なる神」、アヌの上に君臨する「神」がいなくなってしまう。よって、アヌはイエスではない。

ここでも「父なる神」という言葉を持ち出した。聖書的にはイエスは御子で御父はヤハウエであるが、カッパラー的にはイエスの見えない姿がヤハウエで、御父は別に存在する。しかし、ヤハウエの真相はエンキ、エンリルなどの「神々」が1つにまとめられたものである。その中の誰がイエスなのか、あるいはまったく別の存在なのか、ということをごここで検討しているわけであるが、いずれにしても「父なる神」はイエスとは別の存在である。

なお、終末に降りて来る救世主は、すべての大元であるアヌの可能性はある。現代では、誰もシュメールの「神々」はおろか、イエスの顔を覚えている者はいないので、「神々」の誰が降りて来てイエスだと名乗っても、否定できる理由が無い。まして、すべての大元であるアヌならば、象徴的には問題無い。あるいは、表面上の「父なる神」は、見た目がアヌよりも老けてしまったエンリルやエンキでも良いのである。

ただし、人類は救世主としての印、すなわち、手と足に打たれた釘の跡を求めるだろう。終末に救世主が降臨するという考えは、聖書を基盤とするユダヤ

教徒、キリスト教徒、イスラム教徒のみならず、ヒンズー系のカルキ、仏教系のマイトレーヤー、ペルシャのミトラスなど、ほぼ全世界的と言って良い。だから、空から何者かが降臨すれば、その名がイエスであろうと、カルキであろうと、マイトレーヤーであろうとミトラスであろうと、彼らはその存在を救世主として認めるだろう。しかし、それが誰なのか、ということについて、特に聖書を基盤する民にとっては、救世主としての印が必要となる。それこそが、手足に残る十字架に打ち付けられた釘の跡、つまりイエスなのである。だから、シュメールの「神々」の誰が降臨して来ても、その印が無ければ救世主として認めないだろう。そのためにも、“印”は必要である。

しかし、それとて「神々」の誰かがそのような傷を体につけて降りて来れば、人類は否定のしようが無いのである。そうすると、イエスは誰でも良いことになるが、それでは話が終わってしまうので、イエスに相当する人物が存在することを前提に話を進める。

(6) 蛇神エンキとニンギシュジッタ

人類にとって最も重要な場面に関わっているのは、実質的に最初に地球に“降臨”し、遺伝子操作により人類を創成し、大洪水後の人類の礎となったジウスドラ（ノア）の実父であり、人類に知恵を与えて文明化させ、核兵器の使用に唯一反対した蛇神エンキだけである。

しかし、地球の監督者エンリルの意志に反して人類に生殖能力を与え、禁を破って地球人女性と最初に交わったのはエンキであり、核戦争になった原因もエンキの長男マルドゥクである。ならば、罪滅ぼしとしてエンキ自らが十字架に掛けられた、と考えることは可能である。それに、知恵などのすべての根源はエンキであり、聖書の原型も“主エンキの御言葉”である。そして、天照大神も蛇神であるから、聖書の中で十字架に掛けられたイエスはエンキである、と考えたい。

また、神道の観点からは、天照大神は蛇神だから、蛇が十字架に掛けられなければならない。

創世記では、蛇は人類に知恵を授けたため、主に呪われている。この場合の主はエンリルであり、エンリルの意志に背いてエンキ（とニンギシュジッタ）が人類に知恵＝生殖能力を授けたから、「知恵の樹」に絡まる蛇で象徴されるエンキが呪われるのである。何よりも、“呪う”という字がそれを示している。“呪”は“兄の口”であり、「呪われよ」と言った主はエンリルであり、王位継承数字上、エンキの兄と見なせる。（兄エサウが弟ヤコブを呪った原型でもある。）

また、蛇が絡まっていたのは「知恵の樹」であるが、「合わせ鏡」で「生命の樹」でもあり、「生命の樹」にも蛇が絡まっている。だから、「知恵の樹」に絡まる蛇はエンリル（主）にとっては“呪い”であるが、人類にとっては“祝福”であり“福音”であり“慈悲の光”である。

つまり、「知恵の樹」と「生命の樹」を「合わせ鏡」とすることにより、「生命の樹」に知恵と生命の象徴である蛇が掛けられなければならないのである。

イエス存命当時、人類の根強い偶像崇拝の影響は強く、本来あるべき「神」の姿は歪んでしまっていた。そこで、現実世界の「生命の樹」に蛇が掛けられ、人々の精神に楔が打ち込まれることとなったのだろう。「生命の樹」はアヌ及び「神々」の象徴である十字型、すなわち十字架が選ばれた。そこに、「知恵の樹」の蛇に囚んだ、罪を背負って呪われた者が掛けられなければならない。この場合の“呪われた者”とは、その時に人々が崇拝している「神」から呪われた者である。イエスは神殿で偶像崇拝がまかり通っていることを糾弾し、祭司たちの反感を買った。つまり、当時の神殿での「神」はヤハウエの名を語る偶像崇拝の神バアルであり、バアルからイエスは呪われたのである。そして、イエスが十字架に掛けられることにより十字架は「生命の樹」となり、イエスは「生命の樹」に掛けられた蛇となり、人類にとって“祝福”であり“福音”であり“慈悲の光”となったのである。そうすると、十字架に掛けられた呪われた蛇は、エンキであると考えたい。

しかし、エンキはエンリル、ニンフルサグと共にかなり歳を取り、髭を蓄えた壮年だった。妹であるニンフルサグなど、腰が曲がってシワシワだったのである。イエスが活躍したのは 20 代後半から 30 代前半であるから、そのようなエンキが、いくら何でも 30 代のイエスとして十字架に掛けられることはあり得ない。

それに、イエスはニビルの高度な医療によって、十字架刑後に“復活”できた。そのような技術を駆使でき、イナンナを“復活”させたりしたのはエンキ自身であるから、イエスがエンキであることはあり得ない。また、エンキの象徴は太陽ではなく月であるから、太陽の象徴であるイエス＝天照大神ではない。

では、もう 1 人の蛇神でエンキの息子、最も知恵を授けられた息子ニンギシュジッダはどうか。生殖能力の秘密を DNA から発見し、ピラミッドを造り、エンキを真に手助けしたのはニンギシュジッダである。彼無くして、エンキの計画は達成できなかった。象徴的には 2 匹の蛇が絡まったカドゥケウスの杖、あるいは羽の生えた蛇ケツアルコアトルであり、2012 年の冬至で一区切りするマヤ文明のカレンダーを作ったのも彼である。ケツアルコアトル＝白い蛇で、いずれ帰ってくる、と言いついてマヤを去っている。つまり、ニンギシュジッダは“その時”を知らせる蛇神に他ならない。また、マヤ文明は 20 進法を採用しているが、20 という数字は太陽神ウツの王位継承数字であり、太陽神を象徴している。そして、伝承ではエノク・トート・ヘルメス・トリスメギストスで、ピラミッドを造ったことにもなっており、一部の銅版ではケツアルコアトル＝イエスとなっているから、解釈によっては、まさにニンギシュジッダがイエスである。

だが、ニンギシュジッダが十字架を背負う理由はどこにも無い。ケツアルコアトルはいつか帰ってくる、と言いついてはいるが、十字架に掛けられたわけではない。そして、ニンギシュジッダはエンキとアヌンナキの女性の中に生まれているから“神の子”であり、イエスが自分のことを言っている“人の子”には当てはまらない。それに、ニンギシュジッダはエンキ、ニンマーと共に人類を

創りあげたほど古い「神」だから、年齢的にもイエスとしては無理がある。

以上のことから、シュメールの「神々」の中では、誰もイエスに相当する「神」がいなくなってしまった！第一、イエスが活躍したのは 20 代後半から 30 代前半である。シュメールが滅びた時、エンキもエンリルも相当老けていた。当然、継承順位の付いていた王子たちもそれなりの年をとっていたのであり、イエスの時代に、容貌が 20 代や 30 代前半ではあり得ないのである。

また、時を経るに従い、特別な場合を除いて「神々」は人間に姿を見せなくなった。そうすると、「神々」の誰かが直接十字架に掛けられた、と考えること自体に無理があるし、何よりも、イエスは自分で“人の子”と言っている。アヌナキ同士の子供なら、“神の子”となるはずである。

では、イエスとは誰なのか。その重要な手掛かりが 2 つ、“主エンキの御言葉”の中にある。

①主エンキが残した言葉

天と地球が入れ子状の循環を規則正しく繰り返しているのなら、起こったことは、また発生するのだろうか？“過去”は“未来”なのか？最初にやって来た彼が、最後に去っていく彼となるのだろうか？

後世の人々が、“運命によって指定された時”にこの記録を読み、“過去”を思い出し、“未来”を預言として理解してくれるように！“未来”が“過去”の審判者となるように！

これまで見たように、ユダヤ教→キリスト教→イスラム教の流れは、“起こったことが、また発生した”ことである。また、第二次大戦で核兵器が使われたこともそうである。

地球に最初にやって来たのはアラルであるが、彼はアヌとの王位継承争いに敗れて火星で死んでしまったから、最後に去って行くことはできない。よって、“最初にやって来た彼”とは、人類を創成し、知恵を授け、大洪水の惨事から人類を救ったエンキ自身である。だから、“最後に去っていく彼”も必然的にエンキとなる。そして、最初はアルファで最後はオメガであり、ヨハネ黙示録の中で“私はアルファであり、オメガである”と言っているのはイエスである。よって、イエスはエンキである、と言いたいところであるが、それは前述の通り、否定されている。

ならば、イエスが降りて来た後に、エンキは「父なる神」として降りて来て、すべての真相を人類に伝えて去れば、確かに“最後に去って行く彼”となり得る。エンキはあらゆる真相を知っており、その名が示す通り“地球の主”であるから、“人の子”イエスではなく、知恵を駆使して物語をまとめあげた張本人、「父なる神」と言えるだろう。

②エンキが地球人女性に産ませた息子アダパとジウスドラ

人類はエンキらの遺伝子工学によって創成されたが、最初的人类アダムウとティアマトは農業ができるような“文明化された人”ではなかった。初めての

“文明化された人”はアダパとティティである。彼らはアダムゥとティアマトとは異なり、エンキが地球人女性と生物学的に直接交わることにより誕生した。つまり、本当の意味で知恵を備えた人類の祖はアダパとティティであり、エンキが地球人女性に直接産ませたのである。

また、大洪水により、人類のみならず、地球上の生物は絶滅の危機に直面した。それを救ったのがエンキであり、エンキの指示に従って船を造って助かったのがジウストラ＝ノアである。アダパ（とティティ）が本当の意味での人類の祖であるとしたら、ジウストラは 2 回目の人類の祖であると言える。このジウストラも、ル・マクの妻バタナシュに、エンキが秘密裏に産ませた子である。

つまり、人類にとって最も重要な局面に関わる人物、すなわち人類の祖となる 2 組の人間は、エンキが地球人女性と直接交わることによって誕生したのである。エンキは彼らの、そして人類の「父なる神」と言える。ここでも、“起こったことは、また発生した”のである。

以上のことから、「父なる神」とはエンキのことである。そして、イエスは人類の贖罪を背負って十字架に掛けられるという、人類にとって極めて重要な役割を担わされた。それは、前述したように、エンキやエンリルらが人類に授けた正義と道徳が偶像崇拜により崩壊直前であり、それを食い止めるためにヤハウエが創り上げられた。ヤハウエとは、“空の船”に乗って）姿を見せないアヌナキであり、マルドゥクが覇権を握る以前の話ではエンキ、エンリル、アヌなどが 1 つにまとめられたものである。そのヤハウエの厳しい教えさえも人類は再び忘れかけ、偶像崇拜が盛んになった。ここでも、“起こったことが、また発生した”のである。そのため、今度はイエスという実態を伴った“人の子”が遣わされることになったのであろう。

ならば、イエスという“人間”が誕生する重要な局面に於いても、エンキが直接関わったと考えるのが妥当である。やはり、“起こったことは、また発生した”のであり、“過去”は“未来”なのである。

つまり、結論から言えば、エンキが地球人女性マリアと直接交わって産ませた子がイエスである！！そうすると、イエスは確かに“人の子”であり、アヌナキ同士の間で生まれた“神の子”ではなく、辻褄が合う。そして、エンキはまさにイエスの「父なる神」となる。

(7) エンキと地球人女性マリアとの間に生まれた子

いくらシュメールの「神々」の中でイエスに相当する「神」がいなくなったからといって、イエスがエンキの息子、エンキが地球人女性マリアと直接交わって産ませた子、というのは、いささか強引かもしれない。しかし、このように考えると、他にもいろいろなことの辻褄が合う。それを以下に示す。

まず、イエスは自分で“人の子”と言ったから、アヌナキ同士の中にできた子ではない。そして、父親は「父なる神」エンキである。

イエスは人類の贖罪を背負って「父なる神」に捧げられた“犠牲の子羊”である。エンリルの息子ニヌルタはカ・インに農業を、エンキの息子マルドゥクは

アバエルに牧羊を教えた。羊はイエスの原型になっているエンキの息子ドゥムジが、ニビルから持ち帰って来たものである。そして、初物の祝祭の際、エンキはアバエルの育てた子羊を両手に掲げ、マルドゥクとアバエルを祝福した。つまり、羊はエンキに関わるので、エンキの息子であれば“神の子羊”という解釈が可能である。

また、イエスは復活後 40 日で昇天しており、40 はエンキを象徴する数字であるから、エンキが直接関わっていることを暗示する。

他に重要な手掛かりとして、新約に登場する天使がいる。ルカ福音書では、天使ガブリエルがマリアにイエスを処女懐胎したことを告げた。マタイ福音書では、マリアの婚約者ヨセフが彼女の妊娠に疑念を抱き、結婚を取り止めようとしたが、ヨセフの夢の中に天使が現れ、マリアを受け入れるよう命じた。その天使の名は記されていないが、ルカ福音書との比較から、ガブリエルと見なされている。また、ルカ福音書に於いて洗礼者ヨハネの誕生を予告し、イエスが誕生した時に羊飼いに知らせたのもガブリエルであるし、マタイ福音書に於いてヘロデが嬰兒殺害を命じた時、ヨセフに警告してエジプトに逃避させたのもガブリエルであった。ガブリエルは、言わば“お告げの天使”である。

人類にとって重要な局面、例えば種全体として絶滅しそうになった時、ジウストラに見えない姿で“お告げ”として警告し、救ったのはエンキだった。

また、ガブリエルは智天使の長、第一天の支配者、月の天使、水瓶座の天使などの肩書きを持つ。智の根源はエンキだから、エンキは智天使の長であり、エンキは“地球の主”だから第一天の支配者と見なすことができる。そして、エンキは月の不思議に魅せられ、マルドゥクと共に月に滞在して動きを観測したから、月の天使と見なすことができる。それに、水の神エアでもあり、水を吹き出している水瓶と共にある姿が描かれているので、水瓶座の天使と見なすことができる。

つまり、ガブリエルとはエンキの象徴である。ならば、エンキが洗礼者ヨハネの誕生を予告し、エンキがマリアにイエスの懐胎を示唆し、エンキが羊飼いたちにイエスの誕生を知らせ、ヨセフに命じてイエスをエジプトに逃避させたのもエンキということになる。エジプトは、元々エンキの領地であった。

特に、キリスト教に於いて最も重要な場面、マリアの処女懐胎について、マタイ福音書では“胎の子は聖霊によって宿った”とあり、ルカ福音書では“聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる”とある。聖霊や天使というのも、アヌンナキを象徴したものである。そうすると、マリアの子はアヌンナキによって宿ったのだから、エンキがマリアと直接交わることにより、イエスが宿ったことを象徴していることになる。ル・マクの妻バタナシュが、エンキによってジウストラを身籠ったように！バタナシュはル・マクに真相は告げなかったが、マリアの場合、“聖霊によるお告げ”の形式を採っている。そして、エンキ＝「神」であるから、“神の子”となる。ただし、この場合の“神の子”とは広い意味であり、狭義の意味ではアヌンナキ同士の間にも生まれた子だけが“神の子”である。そのため、イエスは後に自分のことを“人の子”と言っている。

このように解釈すれば、マリアはヨセフと交わらずしてイエスを懐胎したのだから、処女懐胎という概念も納得できるものとなる。俗説で言われているような、体外受精でイエスが誕生したわけではないのである。

では、新約に於ける他の重要な登場人物も、モデルとなる「神」があるはずである。

・マグダラのマリア

マグダラのマリアの原型は、これまで見てきたようにイナンナである。マグダラのマリアは通説では“性”に関係し、性的象徴の女神はイナンナである。

イエスは“復活”してから、まずマグダラのマリアの前に姿を現した。“復活”に関しての原型は、イナンナ自身の“復活”と彼女はドゥムジが“復活”すると思いついていたことである。ドゥムジはイエスの原型の 1 人であり、ドゥムジの“復活”を望んでいたイナンナの幻想が、このような話の原型となっている。象徴的にはイエスの“復活”した姿にドゥムジが、マグダラのマリアにイナンナが重ねられ、新約に於いて見事、イナンナは“復活”したドゥムジと再会できたと見なせる。

ドゥムジとイナンナは結婚するはずだった。そして、王位継承数字的にドゥムジと太陽神ウツは同一と見なすことができ、ウツとイナンナの王位継承数字的な関係は正式な夫婦である。そのため、イエスとマグダラのマリアが結婚していた、などという伝承が生まれたのである。

・ペトロ

ペトロの理解力は低かった。それが、後の離反の原因となった。離反とは、イエスの預言通り、鶏が 3 度鳴く前に 3 度イエスのことを知らないと言ったこと、そして男性優位の思想で、救済者の弟子たるには男性でなければならないとするペトロの考えが教団の分裂を引き起こし、それがパウロへと受け継がれ、現在のキリスト教として普及したことである。そのため、教会は男性優位の権力を守るための組織と化し、マグダラのマリアを娼婦として陥れることにより、絶対的な権力を握ることとなった。まさに教会こそ、イエスが注意を喚起したそのものの存在となったのである。

このようなペトロには、いつまで経っても自分の立場が理解できず、己の野望ばかりを追い求め、アヌに赦されたにも関わらず、最終的には核戦争を引き起こす原因となったマルドゥクの姿が投影されている。

・裏切りのユダ

イスカリオテのユダは、銀貨 30 枚のためにイエスを裏切った。そして、ユダは金入れを預かっていたから、“金 (かね)” に操られていたことになる。“金 (かね)” に関わる偶像崇拝の神はマモン・ラーであり、マルドゥクの象徴でもある。よって、イスカリオテのユダの原型はマルドゥクである。

“30” という数字に着目すると、王位継承数字が 30なのはナンナルで、エンリルの息子である。アヌはエンキとニンフルサグを結婚させて王位を継承させ

ようとしたが、ニンフルサグはエンリルとの間に長男ニヌルタをもうけてしまい、正統継承権はエンリル系になってしまった。そのため、マルドゥクは正統継承権を常に主張していた。正統継承者がニビルにとって重要な“金（きん）”として象徴されるなら、傍系は“銀”として象徴され、それはマルドゥクとなる。エンリルとエンキはアヌの息子で、ナンナルはエンリルの、マルドゥクはエンキの長男だから、王位継承数字的にはマルドゥクも“30”として象徴される可能性があったわけであり、アヌの長男はエンキだから、マルドゥクにとって見れば、自分こそが正統継承者＝“金”として相応しいと思っていたのである。だから、“銀貨 30 枚”という象徴でマルドゥクを示唆しているのである。

また、ユダの裏切りによりイエスは捕らえられ、十字架に掛けられた。マルドゥクはドゥムジを毘に掛け、ドゥムジは死んだ。イエスの原型はドゥムジであるから、この事からも、ユダの原型はマルドゥクである。

更に、イスカリオテとは“カリオテの人”という意味のヘブライ語である。カリオテ＝ケリヨトはモアブにあった町の名である。モアブは死海のすぐ東側にあり、死海は核攻撃によって形成された可能性が高い。ニヌルタとネルガルによって核攻撃されたのは、マルドゥク（と息子ナブ）が自らの“神聖”を主張して人類を扇動した場所だから、“イスカリオテ”という地名でマルドゥクに関係することを暗示している。

他の解釈として、イエスの原型を蛇神＝エンキと見た場合、エンキの息子であるにも関わらず、“恐怖の武器”を使用することを提案し、エンリルの息子ニヌルタと組んで、兄弟であるマルドゥクを核攻撃したネルガルもユダの候補になり得る。ただし、その場合、“銀貨 30 枚”という象徴が当てはまらない。また、弟子たちはみんなイエスを見捨てたが、これもイエスの原型を蛇神＝エンキと見た場合、核攻撃に反対したのは唯一エンキだけだった、ということの象徴である。

・イエスの弟子ヨハネ

イエスの弟子ヨハネはイエスから最も愛された。これは、エンキから知恵のすべてを授けられ、人類に生殖能力を与えることに尽力したニンギシュジッダが原型である。マルドゥクもエンキから知恵を与えられたが、完全には信頼されておらず、“死者を蘇らせる”知恵は与えられなかったので、彼はヨハネの原型ではない。

ヨハネ黙示録はカッパールの象徴に溢れ、知恵の使い手の象徴でもあるから、これもニンギシュジッダに相応しい。

・洗礼者ヨハネ

もう 1 人のヨハネが、イエスを洗礼したヨハネである。イエスがエンキの息子ならば、イエスに知恵を授けたのは、当然、エンキである。それが“洗礼”として象徴されている。

ヨハネは元々オアンネスと言い、地上に最初に降りた半神半魚の神であった。これは、魚としても象徴され、アラルを除いて最初に地球に降り立ったアヌン

ナキ、すなわちエンキに他ならない。(アラルは直接人類に関わりが無く、エンキが後に“地球の主”となったので、除外する。) 地球での最初の到着地点は海だったから、魚として象徴される。それはまた、“魚のスーツ”を着ていたことにも因る。そして、エンキは水に関係する神でもあり、水を吹き出している水瓶と共にある姿が描かれている様子は、まさに洗礼を施す様子に他ならない。

だから新約には、いたるところに魚が象徴として登場する。4人の漁師(ペトロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネ)を弟子にしたこと、パンと魚を大群衆に分け与えた奇蹟、復活後に弟子たちと魚を食べたことなど。(旧約では、巨大な魚に飲み込まれたが3日後に吐き出された預言者ヨナなど。魚はエンキの象徴であり、この現象はイエスの“復活”の予型であり、ヨナという名はヨハネにも繋がる。)

以上のような関係は、他の「神々」が地球人女性と直接交わった場合、成立しえず、イエスはアダパやジウストラのように、人類にとって重要な局面に於いて、エンキが地球人女性と直接交わって産ませた子であると言える。だからこそ、イエス＝天照大神は実父エンキの象徴である蛇神として祀られている。そして、エンキが交わった地球人女性の名はマリアである。

では、マリアの血統を考える。新約での正統血統はアダム～セム～アブラハム～ユダ～ダビデ～ヨセフであり、ヨセフの妻がマリアで、マリアの血統に関する他の記述は無い。そこで、血統の手掛かりとなるのはアブラハム＝イブル・ウムである。彼は勇敢で、聖職者の秘密に精通した、王子に相応しい子孫だった。アブラハムはセムの直系、ニブル・キとウリム(ウル)出身の聖職者で王族の末裔である。

・セムーアルパクシャド(アルバカド)ーシェラーエベル(イブル、以降神官)ーペレグーレウーセルグーナホルーテラ(ティフル)ーアブラム(アブラハム、イブル・ウム)。

ならば、ヨセフに繋がるアブラハム以降の血統も同じ血統である。セムはノアの息子であり、ノア＝ジウストラはエンキの息子である。そして、聖職者の秘密をエンキから最初に教えられたのはエンキ・メであり、エンキ・メはアダパの子孫で、アダパはエンキの息子である。よって、聖職者としての秘密を教えられたのは、エンキの直系である。人類は基本的にエンキの子孫と言えるが、途中から他のアヌナキも地球人女性と交わっているから、この場合のエンキの直系とは、男系として純粋にエンキの直系と言える血統のことである。そうすると、イエスの父がエンキであろうとヨセフであろうと、血統的にはエンキの直系ということになり、血統の統一性(純血性)が保たれている。

ならば、マリアの血統はどうか。ここからは、資料がまったく無いのであくまでも推定に留まるが、マリアはウツの血統ではないのか。ヨセフがエンキの直系ならば、マリアがエンリル～ウツの血統であれば、太陽神として象徴

されるイエスによってエンキ系とエンリル系が統一されたことになり、両系統にとっても“光”となり得る。(これ以前にも、ネルガルとエレシュキガルの結婚により統一されてはいるが、彼らの住まいは“下の方のアブズ”であり、それは“冥界”に喩えられるので、“光”にはならない。) このエンキ系とエンリル系の統一は、ドゥムジとイナンナによって果たされるはずだった。ドゥムジはエンキの息子、イナンナはエンリルの孫だから、この 2 人の話が原型であると考えれば、エンキとマリアから誕生したイエスは両血統が統一された証となり、光と平和の象徴となる。そして、“復活”の原型はドゥムジとイナンナだから、エンキ系とエンリル系が統一されたイエスに“復活”が投影されていることは、象徴的にぴったりである。

また、イエスの性質(太陽神、正義等)は象徴的にウツが最も当てはまり、これまで見てきたようにドゥムジ＝ウツと見なせるが、イエスに関わるような具体的なウツの登場は無い。ならば、イエスの性質が象徴的にウツであるということは、マリアはエンリルの血統の中でも、ウツの直系と言えるのではないか。ウツと地球人女性との間にできた子メシュキアガシェルはウヌグ・キで最初の王となり、以下、エンメルカルーバンダーギルガメッシュと王位が続いた。つまり、ウツの血統はエンキ以外の王の血統であり、エンキが直接交わる地球人女性として適している。だから、マリアの父親がウツの直系ということである。そうすると、イナンナがウツと双子だからという理由だけではなく、直接的にウツの性質をイエスに投影することができる。

他に手掛かりとなるのは、十二支族の祖ユダである。旧約では、ヘブライの王はユダの末裔であると言われている。

“ユダは獅子の子。彼は雄獅子のようにうずくまり、雌獅子のように身を伏せる。王笏はユダから離れず、統治の杖は足の間から離れない。”

ウツは、シュメールの楔形文字で“UD”である。これは“輝く”とか“白い”という意味であるが、“ユダ”とも読める。つまり、ユダ族の王イエスは太陽神ウツが大きく関わっていることを暗示する。また、ユダは獅子に関わるが、イナンナは獅子を従えているから、ここでもイエスにイナンナが投影されている。そして、イナンナとウツは双子だから、象徴的に同一である。

イエスは慈悲の存在であるが、偶像崇拜は徹底的に禁止し、正義＝律法を守らせた。カッパーラではヤハウエ＝イエスで、ヤハウエが律法を遵守させた。シッパールから正義の法を人類に授けて遵守させたのはウツであるから、ここにもウツの象徴が色濃くイエスに投影されている。

そして、聖書で最も重要な聖地は神殿があったエルサレムであり、ウツはシッパール、“天の二輪戦車の場所”と“地球の臍”であり“宇宙飛行管制センター”であるエルサレムの司令官だったので、ウツは聖地エルサレムを直接象徴できる「神」である。

また、いと高き神の祭司であったサレム＝エルサレムの王メルキゼデクは、

パンとワインを持って来てアブラムを祝福したが、彼は太陽神ウツ自身あるいは彼が任命した王であり、“パンとワインによる祝福”がイエスの象徴そのものになっている。

これほどウツの象徴がイエスに投影されているのであれば、マリアはウツが地球人女性に産ませた娘である可能性が高い。(3：(3)で述べたように、ウツは人間の娘との間に子をもっているが、他の「神々」のような奔放な性愛は語られておらず、何人かの人間の娘と交わった可能性がある。) そうすると、イエスはエンキ系とエンリル系のかなり濃い血統となり、最も「神」に近い地球人となる。イエスは自分では“人の子”と言っているが、新約の中では“神の子”と言われている部分もある。純粹に“神の子”と言った場合、アヌナキ同士の子である。それに極めて近い存在だからこそ“神の子”とも言われている、と見なせば辻褄が合う。ウツとの血縁が薄ければ、イエスに太陽神としてのウツの象徴を重ねることは難しいのである。

他にも、マリアという名前が暗示的である。同じマリアでも、マグダラのマリアの原型はイナンナである。イナンナはウツと双子で、両者の法的血縁関係は二親等であるが、象徴的には同一である。しかし、二卵性の双子なので、絶対的に同一というわけではないから、同一よりは血縁が薄く、普通の兄弟よりは血縁が濃いと見なせ、一親等の扱いが可能である。すると、ウツに娘がいたとした場合、その娘はウツから見て一親等であるから、血縁的にウツから見たイナンナとほぼ同じ扱いができる。つまり、イナンナが原型であるマグダラのマリアと同じ“マリア”という名前にすることで、ウツの娘であることを暗示していると思われる。

また、セム族の女神が祀られていた最古の古代都市はビュブロス (Byblos) である。ここは古代シリアの港町で、旧約ではゲバルと呼ばれている。ベイルートの北約 30 キロのところにあり、現在のジュバイルである。古代ギリシャギリシャ人はここを、パピルス意味するギリシャ語 Byblos という名前で呼んだ。聖書の英語 “bible” は、この都市に因んだものである。と言うのも、世界最古の図書館がその神殿に附属していたからである。

ビュブロスの王たちは、自分で統治できるようになるまでは、女神から命令を受けていた。王は自分に祝福が与えられることを、そして末永くビュブロスの王であることを、女神に祈願した。その女神の名はマリ、アシュタルテ、アシュラ、アシュトレト (アシュタルテのヘブライ語)、イシュタル、アセト (イシス)、ヘト (ハトホル) など様々である。聖書の語源は“ビュブロス”であるから、これらビュブロスの女神名を原型とする名が、聖書に於ける女性の名前 (エステルなど) として登場している。

(<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/tiakio/antiGM/byblos.html> 参照。)

しかし、よく見ると、エジプト神話のアセト＝アスタ (イシス) とヘト (ハトホル) を除き、いずれもイナンナの別名、変形名である。つまり、マリ＝イシュタル＝イナンナで、これが転じて“マリア”となる。

マリと言えば、ユーフラテス川中流の西岸にあった古代シュメール及びアムル人の都市国家である。マリはメソポタミア南部のシュメール諸都市とシリア北部の都市を結ぶ戦略的に重要な中継点として繁栄していた。マリの市民はシュメールの「神々」を崇拝した。マリの最高神は西セム系の穀物神で嵐の神ダゴン（イシュクル）であり、ダゴンに捧げられた神殿があったほか、豊穡の女神イシュタル（イナンナ）に捧げられた神殿、太陽神シャマシュ（ウツ）に捧げられた神殿もあった。シャマシュはすべてを見通す全能の神として知られていた。（Wikipedia 参照。）

つまり、都市としてのマリはウツ、イナンナ、そして彼らと仲の良かった叔父のイシュクルに関係が深く、ここからも“マリ”という名称とイナンナ、ウツの関係が見て取れる。

以上のことから、太陽神ウツと地球人女性の間生まれた女性マリアにエンキが産ませた子がイエスである、と推定される。エンキが長男マルドゥクのしでかした人類への罪滅ぼしとして、「神々」が核戦争を引き起こした罪滅ぼしとして、もう 1 人の息子イエスに犠牲となってもらったのであろうか。

イエスの正体が判明したところで、もう一度、日本神話を振り返る。神話ではイザナギが川で禊ぎをしていると、左目を洗った時に天照大神が、右目の時に月読命が、鼻の時にスサノオが誕生した。

象徴的には<神々の真相 4>で見たように、天照大神＝ウツ、スサノオ＝イナンナ、月読命＝エンキ＝ドゥムジである。そして、天照大神＝イエスは実のところエンキの息子であり、“マリア”という名の原型はイナンナで、イエスの母マリアはウツの娘である。

つまり、“地球の主”エンキがドゥムジとイナンナ、ウツを原型にしてイエスの話を考案し、その通り、実際にイエスという存在が十字架に掛けられた“事実”を基に、月として象徴される秦氏が天照大神とスサノオの物語を創作した、ということを暗示しているのである。他に、中国、インド、エジプトなどの話も参考にされている。イザナギとイザナミの原型は中国の伏羲と女媧、インダスの蛇神ナーガ、ナーギであるから、その原型は蛇神エンキである。更に、いずれも 2 匹の蛇が柱の周りに逆方向に回って国生みをしているが、柱＝杖の周りに 2 匹の蛇が絡み合っているのはカドゥケウスの杖であり、ニンギシュジッダの象徴である。国生みは人類の創造でもあるから、エンキを手助けし、実質的に遺伝子操作によって人類に生殖能力を与えたニンギシュジッダの象徴となる。

また、天孫降臨の意味も良く解る。何故か、神話では“天＝神の息子”ではなく“天孫＝神の孫”が最初に地上へ降臨したことになる。この場合の“天”は単純に天照大神のことを指すのではなく、天界＝「神々」のことを指しており、特に象徴的な太陽神のことである。つまり、天照大神をイエスとしてではなく、太陽神ウツとしての象徴と見なす。すると、太陽神から見て孫に相当する者が地上に降臨したことになる。イエスはウツの娘マリアの子、つまりウツの孫であり、腐敗した地上に誕生＝降臨したから、“天孫降臨”となるの

である。

日本神話は秦氏によって創られた。それは、まずは天照大神ありき、という大前提に立って創作されたのである。籠神社の石碑が示しているように、「豊受大神 亦名 天御中主神 亦名 天照大神」で、すべての神々が天照大神に集約されること、最初に登場したわけでもないのに、天照大神が国家の最高神であること、各家の神棚には必ず天照大神の御札が必要なことから言える。よって、“天孫降臨”神話により、実際に“太陽神の孫”たるイエスが地上に降臨したことを暗示しているのである。

新約の中で、イエスは様々な奇蹟を起こしている。しかし、それは現実にある得るものではない。イエスの正体がこのように判明した以上、数々の奇蹟はニビルの科学力によるものか、何らかの象徴である。また、大神アヌならすべての元になるからイエスと見なしても問題無いだろう、と推測したが、やはりその可能性は低い。

(8) 終末

聖書は“主”の物語であり、“地球の主”はエンキだから、エンキが中心となってまとめたものであると言える。ならば、“終末”という考えも、エンキによって導入されたのである。それは、“主エンキの御言葉”の中の“最初にやって来た彼が、最後に去っていく彼となるのだろうか？”というエンキの言葉に象徴されている。

イエスが十字架に掛けられたのは約 2 千年前であるが、イエスはエンキの息子だから、それなりの長寿である。エンキが地球人女性に産ませた子アダパの寿命は約 5 万 8 千年で、イエスが誕生したのはそれからかなり地球時間が経過しているから、それより寿命は相当短くなっているとしても、数千年はあるだろう。だから、ヨハネ黙示録の中で、“然り、私はすぐに来る”と言っているのは、地球人にとっては長い期間でも、半ニビル人であるイエスにとっては僅かな期間となる。

それにしても、天照大神の秘密を守り抜いている日本、神道にだけは何故か、終末思想は無い。特定の宗教を信じている人たち、例えばキリスト教徒はイエスの容貌が金髪碧眼でなければ驚くだろうし、イスラム教徒はイエスを認めても更なる絶対神を求めるだろうし、ユダヤ教徒はなかなかイエスの存在を認めないだろう。しかし、大部分の日本人は特定の宗教を信じていないから、隠された秘密が公開されれば納得し、世界中に真相を伝えに行くことができる。だからこそ、八咫鳥によって日本は無宗教“的”にされたのであろう。その日本人について、ヨハネ黙示録では次のように象徴されている。

“勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。私は、彼の名を決して命の書から消すことはなく、彼の名を父の前と天使たちの前で公に言い表す。見よ、小羊がシオンの山に立っており、小羊と共に 14 万 4 千人の者たちがいて、その額には小羊の名と、小羊の父の名とが記されていた。(中略) この後、私が

見ていると、見よ、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、誰にも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手にナツメヤシの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って、大声でこう叫んだ。「救いは、玉座に座っておられる私たちの神と、小羊とのものである」（中略）この者たちは、小羊の行くところへは、どこへでも従って行く。この者たちは、神と小羊に献げられる初穂として、人々の中から贖われた者たちで、その口には偽りが無く、咎められるところの無い者たちである。”

子羊は犠牲の子羊イエス、白い衣を着た 14 万 4 千人の者たちが日本人である。特定の宗教に侵されていない状態が“白い衣”と表現されている。また、十二支族と 12 人の使徒が合わさって 144、多い人数が万、千で表現されている。子羊に従うのが白い衣を着た群衆である。

また、伊勢神宮の権禰宜に囚れば、日本神話は未来永劫に続く繁栄を象徴しているともいう。衣食住を大切にし、自然や神々に感謝することにより、“永遠の祝福”が与えられる、と。“永遠の祝福”とは、まさにイエスが言っていることに他ならない。つまり、日本では終末思想ではなく、最初から“永遠の祝福”なのである。

さて、終末と言えばハルマゲドンである。本来は“メギドの丘”という意味であるが、旧約聖書にメシア（救世主）が降臨する“終末の日”が記述されていることから、ハルマゲドンでの世界最終戦争の後、“選ばれしユダヤ民族”が世界を統治すると信じている。

それを利用しようとしているのが、偶像崇拜のサタニストで表向きユダヤ教徒である国際金融家、シオニストである。シオニストはメギドの丘に“世界最終戦争の地”という看板まで立てて、“王国”の建設を待ち望んでいる。彼らは預言を早めてでも、一刻も早くサタン王国を建設したい。そのためには、ソロモンの第 3 神殿の建設が必須である。現在、そこにはイスラム教の岩のドームが建てられているから、建設のためにはそれを破壊しなければならない。そうすれば、イスラムとの全面戦争は確実であり、そのためには“核”も辞さないだろう。エルサレムはイスラムにとっても聖地だから、イスラムがエルサレムを核攻撃するとは見なしていない。そこにつけ込むのである。

しかし、そんなことになれば、米国と英国を除く全世界を敵に回すことになる。神殿の建設以前に、地球が木っ端微塵となるだろう。それに聖書の民は、ハルマゲドンについてよく知っているから、何としても避けるよう行動するだろう。よって、よく言われているような世界最終戦争が勃発する可能性は低い。

では、サタニストたちはどうするのか。彼らの計略により、世界各地で貧困、飢餓、病気が蔓延し、暴力行為や紛争が頻発する。そして、意図的に借金の証券化、株式の暴落が引き起こされ、金融パニックがもたらされる。世界の諸問題を解決するためには、まずは共通の貨幣を導入することが必要だ、などというもっともらしい主張が流され、危機に直面して思考停止状態にある大衆は騙されて同意する。そして、国連に代わる世界統一政府が樹立される。民族間の

習慣や宗教、価値観の違いこそが様々な軋轢を産み、戦争が繰り返されてきた原因なので、それらは撤廃され、電子マネーや電子背番号が一気に導入され、各人の遺伝子データなど“あらゆるデータ”は中央コンピュータにインプットされて管理される。クレジットカードやIDカードの持ち歩きも不要、ということで、最終的にはマイクロチップが埋め込まれる。ただし、マイクロチップに対しては警戒心を持っている人が多いので、何か小型のたった1枚のカードかもしれない。つまり、“電子の檻”に捕らえられた徹底した管理社会となり、大衆は支配者＝国際金融家が思うままの家畜同然の扱いを受けるようになる。

同時に、世界統一宗教の導入が行われる。これは、偶像崇拜＝サタン崇拜であり、性的倒錯・錯乱、幼児・処女の生贄が堂々に行われるようになり、世界が完全な闇に覆われる。これこそが、三百人委員会が目指す究極の共産主義、グローバル・スタンダード＝サタニズムであり、地上に悪の帝国が完成する。そして、今まで姿を隠してきたロスチャイルドは現人悪魔（あらひとサタン）として君臨する。

現在の世界情勢からすると、このような状況は一時的に達成される可能性が高い。世界を裏から牛耳る三百人委員会は“大バビロン＝淫らな女たちや地上の忌まわしい者たちの母＝バビロンの大淫婦”として喩えられるが、ヨハネ黙示録にあるように、“バビロンの大淫婦”は必ず倒れる。では、その時期はいつなのか。

(9) イエス＝天照大神の降臨時期

A：ニビルの接近時期から推測

公転周期 3600 年の超楕円軌道を描くニビルの地球への接近は大洪水などの様々な大災害をもたらしたが、それ以外に「神々」の住まう国、天の星であり、それは“天の印”として表された。人類史では、農業の始まりが BC11000 年、新石器時代の始まりが BC7500 年、最初の文明開化が BC3800 年であり、3600 年前後の間隔で人類は段階的な発展を遂げている。これは、ニビルの接近毎に、人類が消化しきれ程度の知恵が授けられたからである。そして、地球年は BC3760 年から始まった。つまり、アヌの最後の公式訪問が BC3760 年だった、ということである。それから 3600 年経過すると、ほぼ紀元 0 年前後となり、イエス生誕時と一致する。イエス生誕時には、天空にベツレヘムの星が輝いたが、それはニビルであり、共に八角星で象徴される。人類の贖罪を背負う役割のイエスに、「神々」の星を象徴させるのは印象的である。最接近はイエス磔刑の日であるが、昼の 12 時に全地は暗くなり、それが午後 3 時まで続いた。これは、世界的に起こった現象である。午後 3 時頃イエスが息を引き取ると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂けた。おそらくこの際に、世界各地の海底に見られるピラミッドなどの文明の痕跡は沈没したのだろう。

そうすると、次回の最接近は AD3600 年頃となるが、かなり遠い将来のことで、“電子の檻”に捕らえられて家畜化し、思考停止した人類は自ら動くことができなくなってしまう。しかし、最接近でなくとも、天に“印”として光り輝け

ば良いのである。ならば、軌道も地球側に向かってきているので、まもなく天空に輝く可能性がある。

B：数字のカッパラーによる推測

イエスが処刑されたとされる“33 歳”という数字は、「生命の樹」の隠されたダウトを含めて 11 個のセフィロト、22 個のパスを合わせた数字に由来する。西暦元年を基準とすると、サタンの封印は 1000 年まで、それ以後、2000 年までは地上をサタンが支配した。その支配の切れ目、2001 年に大鳥との対談があった。その後、毎年を 12 人の使徒一人一人に当てはめていくと、イエスは聖なる数 13 人目となり、2013 年である。これは、次回式年遷宮の年である。

特に、前年の 2012 年は<日本の真相>に記したように注目の年で、三百人委員会の世界統一政府樹立予定の年であり、また、ニンギシュジッダが創ったマヤ文明に残されたマヤ暦では、2012 年の冬至が“現在の時代の終焉”となっている。

C：マヤ暦（Wikipedia 参照）

2012 年の冬至と言えば、マヤ文明の暦がここで一区切りであり、フォトンベルト妄想や地球破滅妄想の元となっている。しかし、それは<神々の真相 4>でも見たように、明らかに間違いである。マヤ文明の代表的な特徴としては、次のことが挙げられる。

・ 碑銘の神殿にある石棺の蓋の絵



石棺はエジプトにも見られるように、死者が天国の「神」の下へ行くための乗り物である。この発想の元は、「神々」が“天の船”に乗って天と地の間を往き来していたことによる。また、全体を「生命の樹」に見立てることができ、最も重要なセフィラであるティファレトの位置に人物＝死者が配置されている。「生命の樹」の知恵の象徴はエンキとニンギシュジッダであり、ピラミッドを建造したのはニンギシュジッダである。そして、描かれた人物は、宇宙船に乗るパイロットのように見える。

つまり、死者が“神々の国＝天国＝ニビル”へ行って“復活”することを願って描かれたものである。そして、地球での宇宙空港を管理していたのは、太陽神ウツである。

・ マヤ文明のパレンケ遺跡には、十字架の神殿と太陽の神殿がある。

イエスの象徴であり、太陽神ウツはイエスの原型の 1 人である。また、“いつか戻ってくる”と言ったケツアルコアトル＝ニンギシュジッダは、象徴的にイエスと見なされる場合がある。

・ 数学が発達して 20 進法を用い、“0” の概念を発明した。

シュメールでの地上の監督者はエンリルであるが、大神アヌの王位継承数字

60 に因み、60 進法が使われていた。ならば 20 進法は、太陽神ウツの王位継承数字 20 を象徴している。

- ・青銅器や鉄器などの金属器を持たなかった。
これらは武器になり、戦いによる破滅を防ぐためである。

- ・4 万種に及ぶマヤ文字、高度な建築技術、暦などを持っていた。

シュメールの「神々」ならば可能である。特に、火星と金星の軌道も計算していた。シュメールの太陽系創造神話では、火星はラフム、金星はラハムという双子的な扱いであり、金星はイナンナの象徴である。太陽神ウツはイナンナと双子であるから、太陽系創造神話に於いては、象徴的に火星にも喩えられる。(象徴的には双子だから、金星はウツの象徴にもなり得る。)

また、暦は太陽の黒点や磁場周期に同調していることが、M. コットレルによって示され (マヤの予言、A. ギルバート・M. コットレル著、田中真知・訳、凱風社)、実際に NASA は 2012 年に向けて太陽活動が極めて活発化することを発表している

このように見てくると、マヤの暦は、将来太陽系に発生する大規模な変動を予め知り得た、偉大なる科学者ニンギシュジダによって作製されたものであり、その変動の原因が太陽にあることを太陽神ウツの象徴として示唆していると考えられる。

D：仏教の伝承

イエスに重ねられる弥勒菩薩信仰では、釈迦が入滅してから 56 億 7000 万年後、人類を救済するために、地上に降臨するという。しかし、この数字が年数だとすると、太陽系は消滅している。また、“年 (ねん、とし)” には“人”の意味もあるという。だから、この数字は地球の人口である。ならば、現在の世界人口は 60 億を超えているので、“その時”はいつ来てもおかしくない。

E：最近のテレビ番組



北九州の沖ノ島海底の遺跡から発掘された真鍮の 2 体の金属像を紹介していた。それを示す。

向かって左が両性具有、右が女性像である。両方とも頭には水鳥があり、1 kg で 42cm である。これは、アダムとイブである！アダムは最初、生殖能力が無かったから、両性具有か性無しで表現されるべきである。そして一般的にアダムは男性、イブは女性だから両性具有像がアダム、女性像がイブを表す。水鳥は、人類を創成したエンキの象徴である。両像がまったく同じ大きさなのは、“同じ型”による遺伝子操作によって創造されたことを示唆する。42cm は $4+2=6$ で人間を象徴し、1kg の“1”は“最初”であるから、1kg と 42cm で“最初の人間＝アダム (とイブ)”を象徴している。また、 $4 \times 2=8$ は救世主の象徴でもある。

ちなみに、沖ノ島は秦氏の重要拠点である宗像大社の一部であり、宗像三女神は天照大神の御子神である。

他にも、最近のテレビ番組では、イスラエルの特殊機関アミシャブが失われた十支族との関係を調査するために諏訪大社を訪れた様子や、阿波忌部氏である三木氏、相撲をすべて取り仕切る吉田司家、籠神社の宮司など、今まででは絶対に放映できなかった人たちが堂々と登場するようになった。また、祇園祭はユダヤの祭りであることを、主催者が堂々と主張していたりもする。このようなことは、“その筋”の許可が無ければできることではなく、“その時”が近いことを暗示している。

F：元号及び天皇家から推測

現在、日本の元号は“平成”である。“平”という字は、＜日本の真相＞で示したように、次のように分解できる。



左側はイエスが掛けられた T 字型の十字架である。ならば、右側の横棒は契約の箱アーチの上部、向かい合う点是一对のケルビムである。つまり、“平”という字は、契約の箱アーチの“贖いの座”に安置された聖十字架＝伊勢神宮内宮の御神体を表す。と同時に、聖十字架を運んできた原始キリスト教徒＝秦氏をも象徴しているから、平氏も秦氏である。

他に、“平”に関連する“カタカムナ”という伝説の古代文明がある。これは、シュメールの影響が伺える文明であるが、それを世に知らしめたのが檜崎皐月（ナラサキコウゲツ）氏である。彼は昭和 24 年、兵庫県六甲山系の金鳥山の山頂にある狐塚と呼ばれる芦屋道満の墓で、平十字（ヒラトジ）と名乗る老人と出会い、八鏡文字という古代文字で書かれた巻き物の筆写を許された。それが“カタカムナ”であり、八鏡とは当然、八咫鏡を示唆する。芦屋道満は安倍清明と並ぶ陰陽師で秦氏であり、平十字という名前自体が十字架を意味する。

つまり、“平成”という元号は“平が成る”ということで、“伊勢神宮内宮の御神体が明らかに成る”ということの象徴と見なせる。

また、現在の皇室は、30 年も経過したら宮家が存在しない。つまり、天皇家のみということになる。聖書に於ける正統血統は、次のように、ことごとく弟が優先されている。

- ・カイン（兄）とアベル
主への捧げ物をしたが、主はカインを無視してアベルの方を選んだ。
- ・エサウ（兄）とヤコブ
長男の権利をヤコブが得た。

- ・ヨセフ（何人かの兄たちの弟）

兄たちに憎まれたが、主の祝福を受けた。

- ・アロン（兄）とモーゼ

主の言葉を聞くのは弟のモーゼであり、アロンはモーゼの口となった。

“その時”にも当然、そうなると考えられる。ならば、仮に現在の皇太子殿下が即位されても、それは一時的なことであり、皇統は更に秋篠宮殿下から悠仁親王殿下へと継承されることが、ほぼ決定的となった。まさに、“平が成る”“平成”の時代に、弟宮への皇統継承移動が明らかとなった。

G：聖書から推測

<日本の真相>で示したが、旧約のエゼキエル書にこうある。

“見よ、私はエフライムの手にあるヨセフと、その友であるイスラエルの部族の木を取り、これをユダの木に合わせて、1つの木と成す。これらは私の手で1つとなる。…見よ、私はイスラエルの人々を、その行った国々から取りだし、四方から彼らを集めてその地に導き、その地で彼らを1つの民と成してイスラエルの山々におらせ、1人の王が彼ら全体の王となり、彼らは重ねて2つの国民とならず、再び2つの国に分かれない。”

1つの木と成すのは“私”であり、“私”はイエスである。ならば、ここでいう“ユダ”はイエスのことではなく、あくまでも“地上に於けるユダ族あるいはその象徴”と解釈する方が適切である。そうすると、エフライム族とユダ族が1つの木となる象徴的現象が起きた時、天照大神＝イエスが再臨することとなる。

エフライムの木は、現在封印されている伊雑宮の心御柱、草薙の剣＝アロンの杖である。草薙の剣は近畿・東海の物部氏である尾張氏＝海部氏のものであり、尾張氏＝海部氏は北イスラエル王国＝サマリアの王族、エフライム族の王族であるから、その王権の象徴たるアロンの杖が草薙の剣である。

伊雑宮にアロンの杖が戻されて心御柱となる時こそ、すべての準備が整った時である。ならば、“エフライムの木”に合わせて1つとする“ユダの木”とは、伊雑宮となる。聖十字架は最初に伊雑宮に存在したので、伊雑宮は聖十字架＝ユダの木の象徴でもある。

“その時”に天照大神が御降臨されると、“私はアルファでありオメガである”から、“阿吽”が完成となる。アルファと阿は始まりであり、イエスの誕生を表し、オメガと吽は終わりであり、イエスの再臨を表す。終わり＝尾張に通じるから、尾張氏は“阿吽”の“吽”に相当する。それは、狛犬からも解る。向かって右の阿像は獅子であるからユダ族の象徴で、イエスはユダ族の中に誕生した。左の吽像はユニコーンであるからエフライム族の象徴で、それは物部氏の

中で最大勢力を誇り、王権の印であるアロンの杖を所有する尾張氏である。つまり、“その時”＝“終わり（尾張）の時”には、尾張氏あるいは尾張氏に関係するものが重要な役割を果たすわけである。それはすなわち、尾張地方が注目される時期であり、尾張氏所有のアロンの杖が伊雑宮に戻され、王権の印が伊勢神宮にすべて揃う時期に他ならない。

H：日本の情勢から推測

・伊勢神宮の大宮司

2007 年の 7 月から、伊勢神宮の大宮司が交代した。それまでは旧皇族の北白川道久氏であったが、現在は旧公家の鷹司尚武氏である。

北白川氏は皇族の北白川宮永久王の長男で、明治天皇のひ孫にあたり、戦後、皇籍を離脱した。祖母の北白川房子さんは、1947 年から 1974 年まで神宮祭主を務められた。学習院大学を卒業後、東芝に入社し、音響海外部長、国際協力室長、財団法人東芝国際交流財団専務理事などを歴任した。2001 年 4 月、神宮大宮司に就任した。

鷹司氏は、昭和天皇の三女で神宮祭主も務めた故・鷹司和子さんの養子である。鷹司氏は 1972 年に慶応大学大学院修士課程修了後、NEC などを経て、2003 年から NEC 通信システム社長を務め、2007 年に退任した。現陛下の義理の甥にあたる。

鷹司家は五摂家の 1 つであり、現在の大宮司、鷹司尚武氏は中臣系の大宮司への復活である。

鷹司は“鷹を司る”であり、鷹は鳥で、鳥は聖霊に関するから、「生命の樹」の峻厳の柱に相当する。そして、大宮司としてイエス＝慈悲の柱を祀り上げるから、まさに祝詞をあげていた天児屋根命に相当し、天照大神が御降臨される時の大宮司として相応しい。

また、神宮の大宮司としては戦後 9 人目だから、1 人当たり約 6～7 年の任期である。そうすると、鷹司氏の任期は次回式年遷宮終了後ぐらいまでとなり、任期的にも、まさに式年遷宮のために就任したと言っても過言ではない。つまり、“その時”のために選ばれた正統血統の大宮司、と言っても過言ではない。

・式年遷宮と干支

次回神宮式年遷宮は 2013 年である。アロンの杖を守り抜いてきた熱田神宮は 2013 年の創建 1900 周年に向けて改修に入り、国生みのイザナギ、イザナミに関わる多賀大社は、平成の大修理が終了した。裏から取り仕切る下鴨神社の式年遷宮（大修理、宮移し）は 2015 年で、神宮の式年遷宮と賀茂神社の宮移しの年差は次第に開いていくから、神道の裏と表が連動するためには、次回式年遷宮前後が最も可能性が高い。つまり、すべてが 2013 年に集約されるよう、動いている様相である。八咫鳥は、伊雑宮が復活する前に、裏である河合神社が復活すると言っているが、世界遺産に指定されている賀茂神社領域に存在する河合神社の表立った復活はあり得ず、2015 年へ向けての大修理がその代わりとなるだろう。

そして、2012 年は辰年、2013 年は巳年で、どちらも蛇に関係し、天照大神は蛇神である。特に、2013 年の巳は癸（みずのと）巳であり、“癸”とは水の弟、水である弟、のことである。水に関わるシュメールの「神」はエンキであり、エンキは王位継承数字的にエンリルの弟扱いであり、あらゆる蛇神の原型である。単純な干支と式年遷宮の周期は 60 年に 1 度一致するのみで、次の一致年である 2073 年はかなり先であり、そこに“癸”のような十干が重なるのは、更に先のこととなる。そして、“癸”に絶対三神が「合わせ鏡」となっている草冠＝艸をつけると“葵”となる。“葵”は賀茂神社の社紋であり、葵祭りが示すように“復活”の象徴である。そして、天照大神は蛇神だから、癸巳の年ほど天照大神の“復活”に相応しい年は無い。やはり、2012 年、2013 年は最重要である。また、2013 年に創建 1900 周年となる熱田神宮の御神体はアロンの杖だが、アロンの杖はエジプトのファラオの前で蛇に変身しており、これも蛇に関係する。

以上のことから、“その時”は、エンキの息子で知恵の神ニンギシュジッタが示した独自のカレンダー、マヤ暦が示していると思われる。つまり、2012 年冬至から次回式年遷宮の 2013 年にかけての時期が最も可能性が高いと推定される。

NASA は 2012 年に向けて太陽活動が極めて活発化することを発表しているし、温暖化の本当の原因も二酸化炭素ではなく、太陽活動の活発化にあることを掴んでいる。過去を振り返れば、印はいつも天に、特に太陽活動に現れていた。

そして、すべてが収束している 2012 年から 2013 年に掛けてこそ、新たな時代の幕開けに相応しい“時”は無い。新たな時代とは、「神々」に因る宗教の時代から、真に人類が目覚め、平和に満ちた人類独自の歩みを始める時代のことである。

神宮宇治橋に掛かる鳥居の中心から、冬至の日に太陽が昇る。冬至は昼が最も短くなる日で、翌日から少しずつ昼の時間が長くなる。つまり、冬至とは“太陽の死と復活”を象徴している。また宇治＝ウズで、宇治橋は“光の橋”となり、冬至の日につかる柚子湯の柚子は、象徴的には柚子＝ウズ＝光＝イエスなので、まさに“イエスの死と復活”に相応しい。

つまり、2012 年の冬至とは、新たな時代の幕開けを象徴しているのではない。そして 2013 年、“新たな時代の幕開けを告げる式年遷宮”が行われ、天照大神＝イエスが御降臨されるかもしれない。

終末には、預言された通り、エンキの息子イエスが降臨するだろう。しかし、果たしてそれだけだろうか。否。御子イエスに続いて、御父で“地球の主”であるエンキも降臨するだろう。そして、すべての真相が明らかにされる。あるいは、アヌンナキ全員が降臨し、大神アヌの御神託があるのかもしれない。降臨により真の平和が達成された後、アヌンナキの「神々」は去るだろう。そして、エンキが最後に去って行き、“最初に来た彼が、最後に去っていく彼”となる。

<かごめ歌>

かごめ かごめ
籠の中の鳥は じっくり出やる
夜明けの晩に 鶴と亀がすべった
後ろの正面 だあれ

“奥義を守り抜いてきた日本の真実はいつ公開されるのか。世界に公開される前に、まず日本で事実が公開され、日本が真に 1 つとなる。その時、天照大神＝イエスが降臨し、誰もがその御姿を拝見することとなる。”

参考著書：

- ・ゼカリア・シッチン著、「人類を創成した宇宙人」、徳間書店。
- ・ゼカリア・シッチン著、「神々との遭遇 上・下」、徳間書店。
- ・ゼカリア・シッチン著、「〈地球の主〉エンキの失われた聖書～惑星ニビルから飛来せし神々の記録」、徳間書店。
- ・造事務所編著、「「天使」と「悪魔」がよくわかる本」、PHP 文庫。
- ・造事務所編著、「「世界の神々」がよくわかる本」、PHP 文庫。
- ・学研 NSM ブックスエソテリカ宗教書シリーズ、「古代秘教の本」
- ・学研 NSM ブックスエソテリカ宗教書シリーズ、「神秘学の本」
- ・学研 NSM ブックスエソテリカ宗教書シリーズ、「イスラム教の本」
- ・学研 NSM ブックスエソテリカ宗教書シリーズ、「ヒンドゥー教の本」
- ・学研 NSM ブックスエソテリカ宗教書シリーズ、「チベット密教の本」
- ・学研 NSM ブックスエソテリカ宗教書シリーズ、「道教の本」
- ・学研ムーブックス、ネオ・パラダイム ASKA シリーズ。
- ・A. ギルバート・M. コットレル著、田中真知・訳、「マヤの予言」、凱風社。

初版：2009 年 8 月

改定：2012 年 12 月

改訂 2 版：2013 年 2 月